

成安造形大学附属近江学研究所

紀 要

第 1 号

JOURNAL OF OMI MULTI-CULTURAL INSTITUTE OF
SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN
NO.1

発刊にあたって

平成二〇年（二〇〇八）に成安造形大学の附属研究所として、近江学研究所が設置されました。それ以来毎年研究紀要として『近江学』（A B判九六ページ）を発刊し、すでに第四号を数えています。これには論文・研究報告・対談・公開講座・情報・写真による自然レポートなど多岐にわたって収録されています。

今年度から文化誌『近江学』とは別に、研究分野に特化した『近江学研究所紀要』を新たに刊行することになりました。紀要では、研究者による近江に関する論考・研究調査報告などを掲載し、近江の文化の検証・再発見などに寄与できればと考えています。皆様の忌憚のないご意見を賜れば幸甚です。

平成二四年三月

成安造形大学附属近江学研究所

所長 木村 至宏

目次

里山 水と暮らし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

大岩 剛一・大原 歩

宮座の祭礼 今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状・・・・・・・・ 35

加藤 賢治

成安造形大学所蔵「寄贈浮世絵コレクション」・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

小寺 善通

里山

く水と暮らし

大岩 剛一・大原 歩

Title :

Satoyama: The Interrelationship of People and Water

Summary :

This is a report of field research carried out in the Hirao area of Ogi, Shiga, regarding the relationship of the area's inhabitants with water in their daily lives, and centered around the themes of "terraced fields" and "farm houses".

第一章 調査の目的

大岩 剛一・大原 歩

* (第二章 二〇三 / 大原担当)

里山は、人と自然が共生するための持続可能でエコロジカルな環境モデルである。そこには、私たちの暮らす効率的な社会とは異なる時間がお流れしている。自然界をおおう時間と、モノや暮らしを取り巻く時間。生命にとつての時間と、死者にとつての時間。里山のコスモロジー（宇宙像）は、これら地層のように堆積した時の上に、すなわち現在という時間と空間の中にさまざまなかたちで見出すことが可能だ。本研究は、滋賀県大津市仰木の里山を、自然環境・生活・信仰の諸相によつて構成された「水のコミュニティ」としてとらえ、人と自然の有機的なつながりと、それを支えるコスモロジーを浮き彫りにすることを目的としている（註1）。

なお本研究は、成安造形大学附属近江学研究所における二〇一〇年度近江学研究「里山く水と暮らし」の第一期「水系からみる集落の空間構成・景観要素に関する研究と聞き取り調査―大津市仰木地区―」の成果を、「仰木平尾地区における棚田の水循環システムに関する調査と研究」、及び「仰木平尾地区・

西村家における住居と聖域に関する調査と研究」としてまとめたものである。また本調査は、本学学生二〇名を対象とした通年の授業、「プロジェクト演習A1」（テーマ…里山・水と暮らし）としても行った。

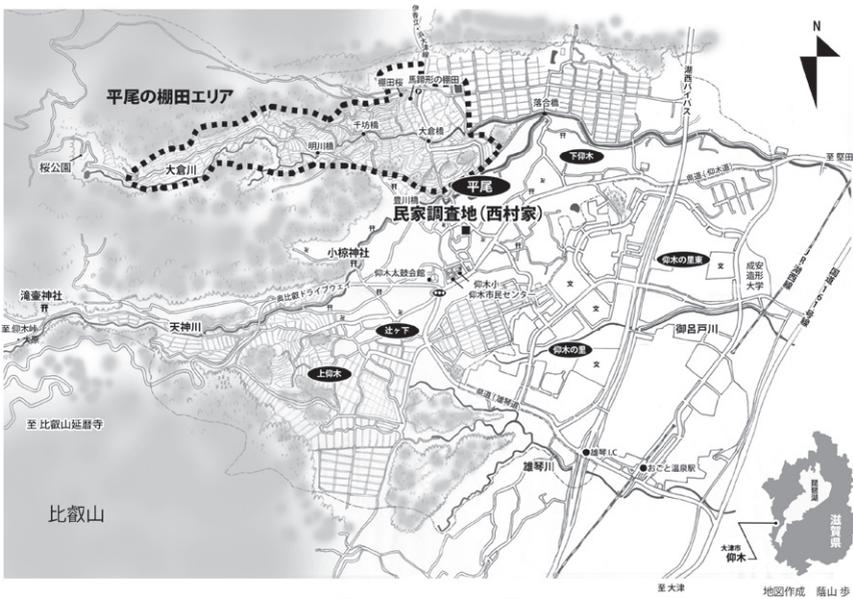


図1：仰木全体地図

〔註1〕仰木：大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数七九五戸、人口二二七二人、四つの字から成る大きな農村集落だ。仰木の集落形成の歴史は約一二〇〇年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ西近江路(国道161号線)から西へ分岐し、京都の大原で若狭街道、いわゆる鯖街道と合流する仰木道の途中に発達した。集落には、小椋神社を筆頭とする多数の社寺、無数の地蔵や祠、共同墓地が点在し、東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる。

第二章 仰木平尾地区における棚田の

水循環システムに関する調査と研究

二一 概要

近年、仰木も他の農村同様、圃場整備や道路工事等の開発によって大きく姿を変えつつあり、住民の意識や暮らしにもさまざまな変化が見られるようになった。仰木の集落は、上仰木・辻ヶ下・平尾・下仰木の四つの字によって構成されるが、中でも平尾地区の集落の外縁部には、いまだ圃場整備の手が届かない、自然の地形を利用した棚田が数多く残る。

この棚田の北縁の山裾を、全長一・五キロメートルの幅の狭い人口の用水路が流れている。この用水路は「北山水路」と呼ばれ、平尾地区に大小十本ある用水路の中で最も長いものである。本調査では、北山水路の源流に当たる大倉川の取水口から下流までを歩いて辿り、用水路の水をそれぞれの棚田に行き渡らせるための仕組と、水の管理運営の実態を明らかにする。

調査協力（敬称略）

- ・ 地元住民：西村義一（里山・棚田守り人の会顧問）、廣岡太平衛（仰木学区自治連合会副会長）、堀井登夫（前平尾自治会長）、中川眞、中川峯一、辻晋一、北村敏信（酒店経営）
- ・ 研究者：山本早苗（富士常葉大学社会環境学部講師、専門：環境社会学）

二一 井堰と水の循環システム

仰木は東西に細長い集落である。比叡山麓から湧き出て東の琵琶湖へと注ぐ、天神川と雄琴川という二本の川に挟まれた尾根伝いに発達したためだ。尾根の高所を流れる天神川から取り出された水は、井堰と呼ばれる用水路をゆるやかに流れながら途中に設けられた分水口から次々と低い田に落ちて棚田全域を潤し、残った水は溜池や、かつては集落内の各家庭にも引き込まれていた。

北山水路は、比叡山麓の湧水である大倉川水系（天神川上流に注ぐ支流）から分岐させた人工の用水路で、本井堰と呼ばれている。北山水路には、その途中にいくつもの分水口が設けられていて、必要に応じて開閉したり水量調節したりしながら、それぞれ持ち主の異なる田に水を落とすことができるようになっていく。

分水口のメカニズムは、素材で多彩だ。水路の側壁にはあらかじめ小さな穴が開けられていて、水はそこから自動的に下の田へ流れ落ちる仕組みになっている。しかし、高所から勢よく流れてくる水や下の田に落とす水の量を調節したり、堰き止めたりする必要から、丸太の切れ端や土囊、石、堰板、ペットボトル、雑草等を穴に詰めたり、ゆるめたりしながらコントロールしている。また水路から離れた田に水を運ぶ時には、小井堰と呼ばれる短い補助の水路を設けて田とつなぐ。長い樋を土手の上に渡したり、土手の土中に埋めたりして水を運んでいると

ころもあった。

大倉川を源流とする本井堰の水は、主要地方道である伊香立浜大津線の手前で棚田への供給をすべて終え、最後は大倉川の溜池に落ちて終わる。平尾の棚田総面積六〇ヘクタールのうち、北山水路の水だけで、なんとその二分の一に相当する約三五ヘクタールもの田の水をまかなっているのである。

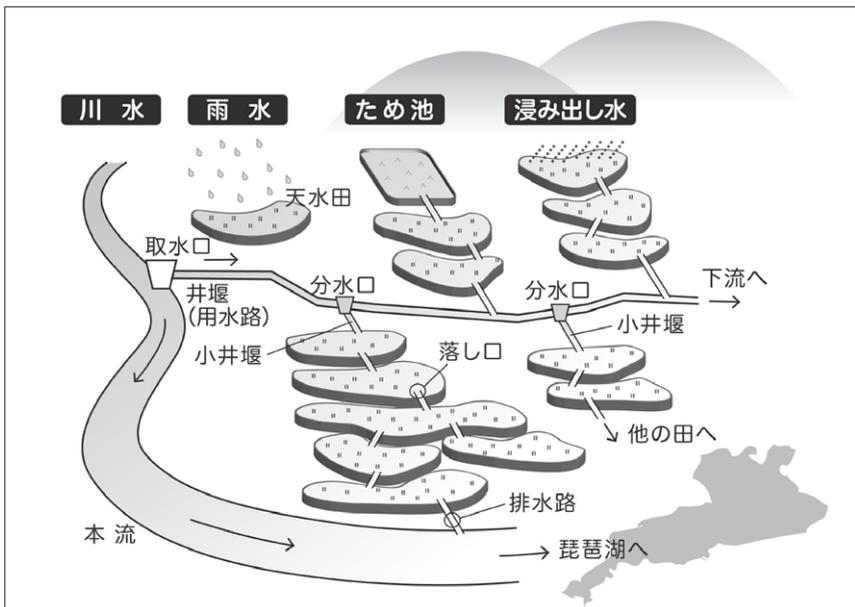


図2：棚田水利用システム図

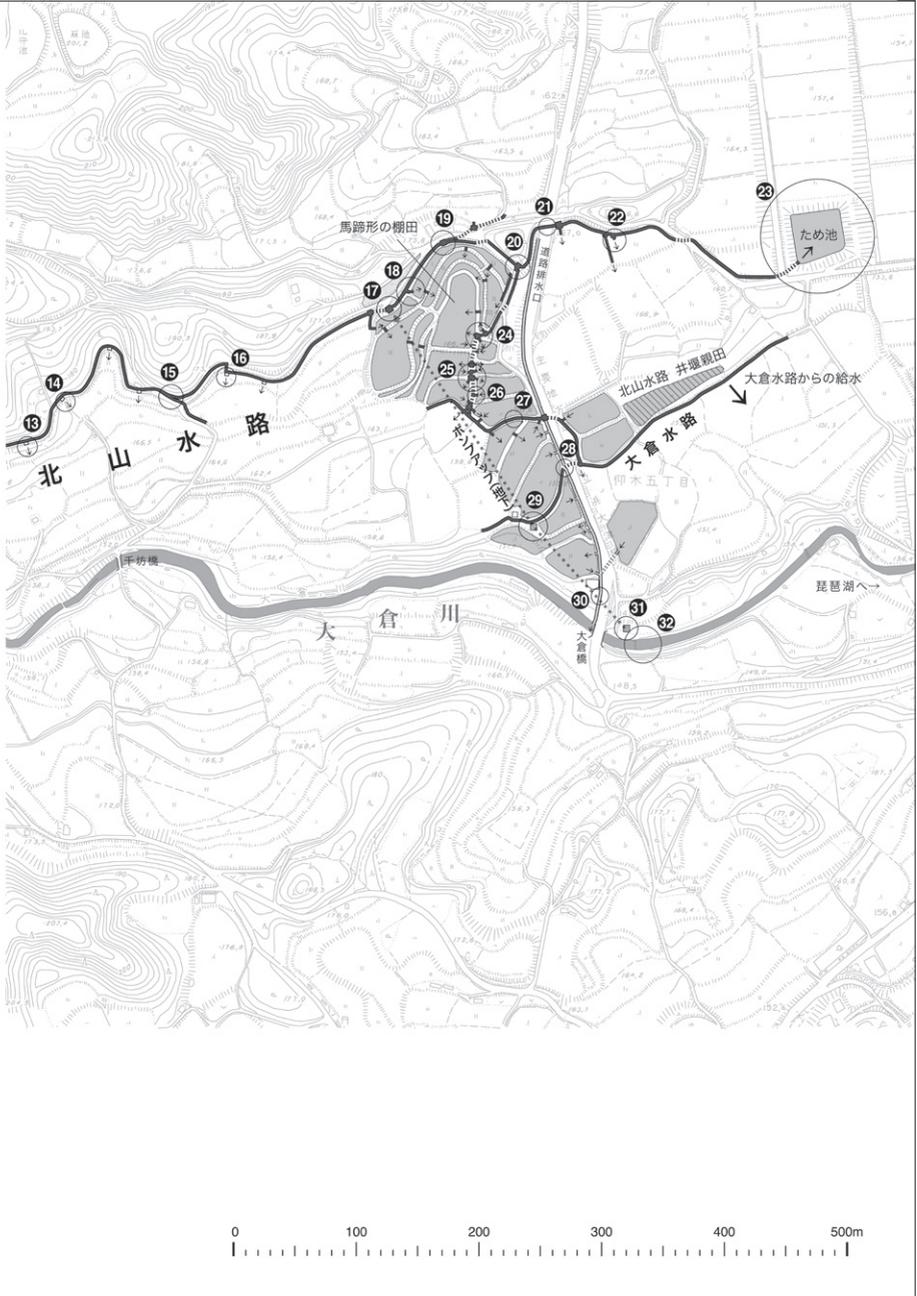
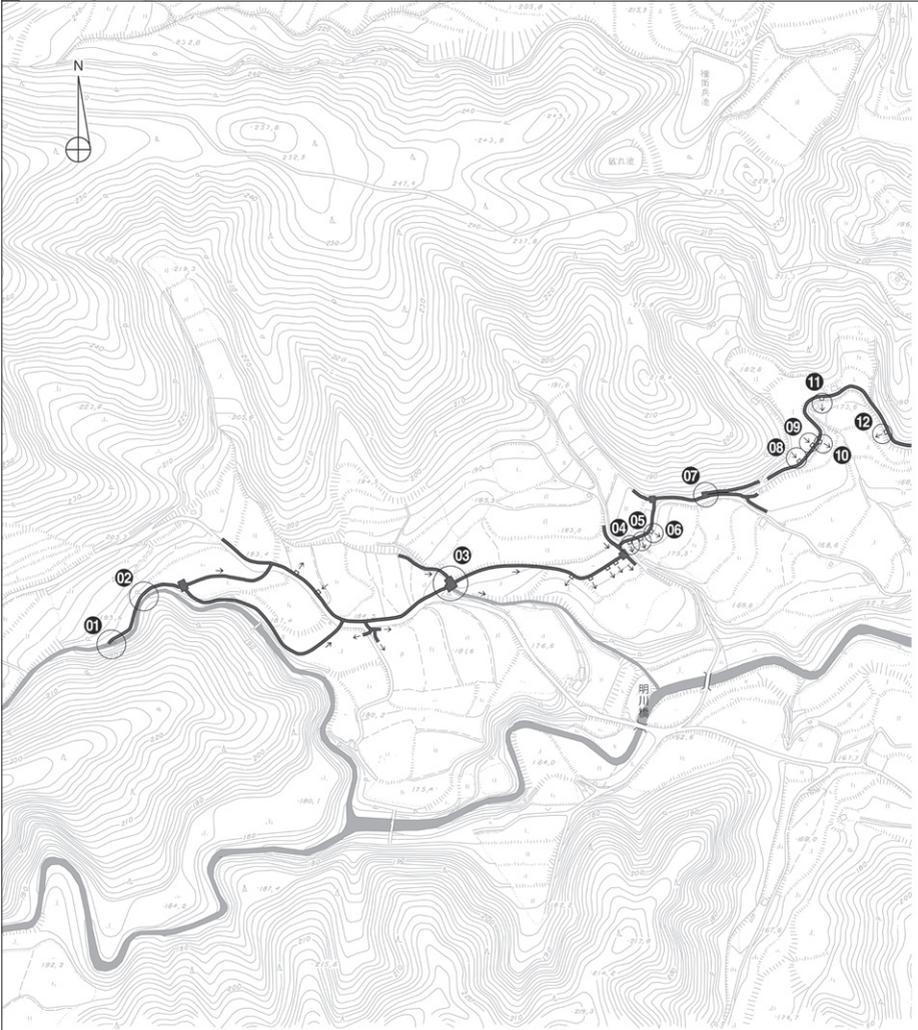


図3：北山水路と棚田の配水システム





02 / 大倉川の崖の途中を流れる北山水路



01 / 大倉川の取水口。北山水路（写真右・井堰）はここからはじまる



04 / 水路から離れた田んぼに長い樋を渡して配水する



03 / 高所から引かれた小井堰と北山水路の合流点。上からの水量が多い時はここで調節して大倉川に戻す



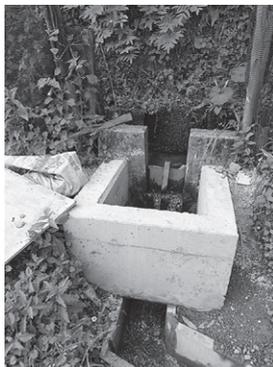
06 / 丸太による水量調節



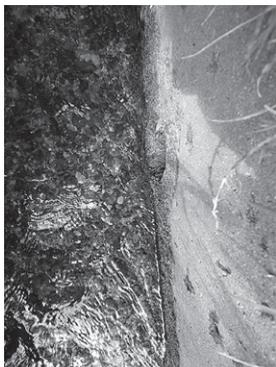
05 / 丸太の隙間に雑草を詰めて水量調節。水は下の田へ落ちないで直進する



08 / 土手にパイプを通し、山手の田の水を北山水路（写真右下）に落とす



07 / 下の田へ送る水の量を調節する分水口とコンクリート樹



10 / 下の田へ水を落とす分水口



09 / 山手の田の水を直接土手の上に流して北山水路（写真下）に落とす



12 / 分水口（写真左）をふさぐ石



11 / 水を堰き止め、水嵩を増やしたい時に使う石が近くに用意されている



14 / 丸太の木切れを詰めて分水口をふさぐ



13 / ペットボトルでふさぎ、流れを直進させる



16 / 丸太の太さを調節して隙間を作り、配水量を加減している



15 / 小井堰への分岐点に設けられた板。下の田に落とす水量を調節



18



17 / ここから先は北山水路の終点に近く、田への配水量の不足を補うために大倉川からポンプで揚水して補給している



20 / 北山水路と下の田へ水を落とす小井堰との分岐点



19 / 北山水路(写真中央)と小井堰(右)の分岐点。閉じる時は土囊を積む



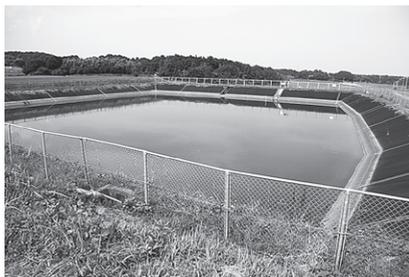
22



21 / 県道の上に渡したパイプの中を流れる北山水路



24 / それぞれに異なる田の高低差。分水口の高さもまちまち



23 / 北山水路の残り水はため池に集められる



26 / 田の畦に作られた暗渠の分水口。オーバーフローした水が自然に落ちる



25 / 土手にパイプを通し、下の田へ水を落とす



28 / 大倉水路の上を流れる県道脇の雨水側溝に、一番低い田の「ほかし水」が合流する



27 / 上の田の土手から浸み出た水を受け、下の田に配水するための水路



30 / 棚田を通過した最後の「ほかし水」を大倉川に戻す排水路



29 / 給水ポンプ場から送られてきた水を貯めるポンプ貯水場。ここから北山水路に揚水する



32 / 大倉川にもどった棚田の水



31 / 大倉川から水を引く吸水ポンプ場

二二三 水の管理運営システム（井堰親制度と番水制^{ばんすいせい}）

棚田にとって一番重要なことは、各田への水の給水である。仰木では、自然環境に適した仰木独自の水利組織である「井堰親制度」が採用されている。井堰親とは、水路から各田への水の配分の決定や、井堰の取水口・分水口の開閉を行う権利、および水路の点検・管理の義務や他の井堰組織との連絡調整など、水の管理運営とその決定に関わる重要な役割を担う。

仰木の独自性は、井堰親が所有している田（井堰親田）の位置にみることができる。一般的には井堰に最も近い最上段の田を井堰親田とすることが多いが、仰木では井堰から最も離れた最下段の田を井堰親田としている。水量が減るなど、給水が難しい一番低い位置にある田の持ち主を井堰親と決めることで、水の配分の平等性に配慮した民主的な管理運営システムとなっているのがわかる。

井堰親制度の水の分配システムとしては、北山水路に見られる夏の「番水制度」がある。夏は山の水が減るため、予測される水不足に対し、水を使う田の数や、田への水入れの時間を制限しているのだ。北山水路の場合は、全長一・五キロメートルある水路を四分割し、分水口を開口する水入れ時間に制限を設けている。源流に近い上流から下流に向かって順に、午前八時から午前十時までの二時間、午前十時から午後二時までの四時間、午後二時から午後八時までの六時間、午後八時から午前六時までの十時間と決めている。しかも下流に行くにつれ、時間

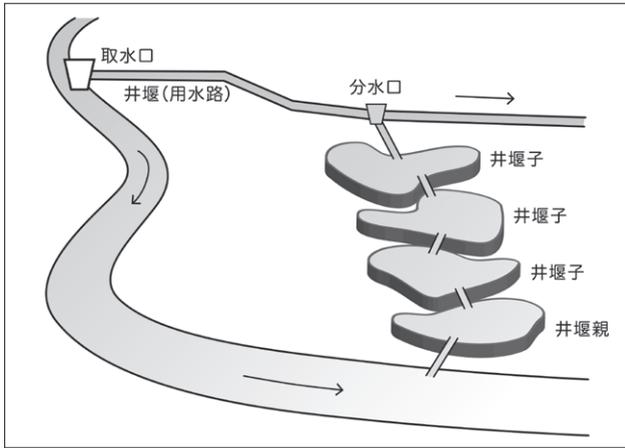


図4：平尾地区における棚田の井堰親制度概念図

が長くとられているのがわかる。上流から遠く離れた下流では、水の勢いが落ち、水量も減るからだ。番水の水入れの際には、井堰子は全戸から参加し、井堰親の確認を受ける。
 細分化された棚田の一枚一枚に水を行き届かせる小井堰と、水の管理運営システムには、先人のたゆまない自然との対峙から生まれた知恵が詰まっている。

(大原歩)

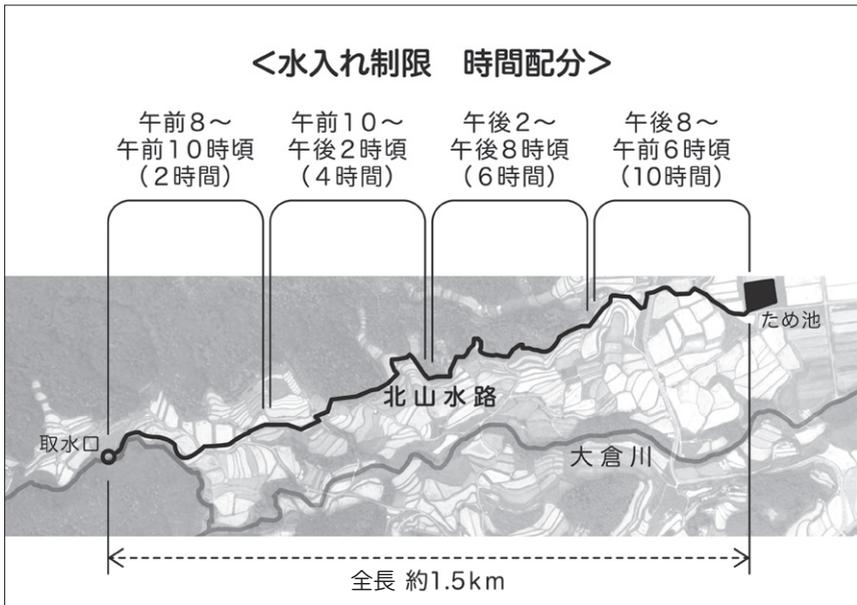


図5：北山水路における水の分配システム（番水制）

※水入れの時間配分は年によって異なる場合あり。

参考文献・

- ・山本早苗、「土地改良事業による水利組織の変容と再編」滋賀県大津市仰木地区の井堰親制度を事例として」、『環境社会学研究九』、頁一八五～二〇一（二〇〇三年）
- ・山本早苗、「人為的自然の限界で暮らす人びとの生活実践」滋賀県大津市仰木町の里山・棚田利用」、『平成十四年～十六年度科学研究費補助金研究成果報告書「環境保全におけるローカルな知の伝承に関する研究」』、頁三七～七十三（二〇〇五年）

二四 結び

神体である聖なる山から湧き出た水は、いわば神の体液である。稲を実らせ、自らの身体に取り込まれるこの聖なる水は、里山という遠大な時空の中であらゆる生命と豊かな精神文化をはぐくんできた。地中に浸み込んだ雨水が森を豊かにし、一筋の川となつて琵琶湖に注ぐ。湿気をたつぷり含んだ水蒸気は、雨雲を呼び、再び里山に恵みの雨をもたらす。ここでは、自然界の循環と人々の宇宙観とがそっくり重なっているのである。

北山水路は、比叡山麓の湧水を水源とする大倉川の上流から分岐させている。ひとつの田から溢れた水がそのすぐ下の田にそして、すべての田を順番に通過した水が本流の大倉川に戻り、はるか下流の琵琶湖へと流れ込んでいる。

比叡山と琵琶湖を結ぶスケールの大きな水路網計画。素朴で合理的な井堰のシステムと、水を民主的に分配し、通わせるための管理運営システム。今日の仰木の里山の風景を支えているのは、二千枚とも言われる棚田に水を運び、行き渡らせる、そ

うした昔からの豊かな知恵である。そして、井堰や田はもちろん、川も琵琶湖も汚さない村人の細心の配慮であり、命の水を守る心なのである。ここには、水と暮らしが有機的に結びついた水のコミュニティが、今も生き続けているのだ。

二五 研究の成果

- (一) 本学の地域連携推進室が取り組んでいる大津市都市計画課主催「仰木地区活性化モデル検討会議」に、調査メンバーの学生四名が参加。
- (二) 仰木学区文化祭において、今回実施した棚田水利調査報告に関するパネル展示を行った。（主催・仰木学区文化協会、二〇一〇年十一月一日～三日、大津市立仰木太鼓会館）
- (三) 「平成二十三年度 仰木人権教育研究会」における講演と活動報告（主催・仰木人権教育研究会、二〇一一年六月二九日、成安造形大学生涯学習センター）
1. 基調講演「里山と棚田」（大岩剛一）
2. 平成二十二年度近江学里山研究「里山と水と暮らし」活動報告（大岩剛一）
3. 仰木棚田における管理と仕組（大原歩）
- (四) 二〇一〇年八月十四日付「京都新聞」朝刊、関西広域ニューズ欄に、「棚田の水路 マップに」大津市仰木／取水や分水／先人の知恵いっぱい／成安造形大学生ら歩いて調査」の見出しで掲載される。

第三章 仰木平尾地区・西村家における

住居と聖域に関する調査と研究

三一 概要

「第二章 仰木平尾地区における棚田の水循環システムに関する調査と研究」で調査した平尾地区棚田エリアのひとつ、通称「馬蹄形の棚田」の持ち主である西村貞子氏に協力をいただき、氏の自宅を調査した。調査地は比良山系を望む、比較的平坦な仰木平尾地区の中心部に当たり、築一〇〇年以上（明治後半）の母屋と土蔵、農具小屋、増築された離れが、広い屋敷地にコンパクトに配置されている。母屋の前には土地の傾斜を利用した築山庭園があり、東側の前面道路からゆるやかなスロープを下って母屋の正面に至る。スロープの両側には自給のための菜園が広がる。

屋敷地と民家の実測、及び家主への聞き取りに基づいて図面を作製し、調査時点における屋敷地内の水利用と植生、信仰のそれぞれを図面上にプロットした。この研究は、調査対象である三つの「記憶のかたち」から、住居におけるコスモロジー（宇宙像）の輪郭を浮き彫りにする試みである。

調査協力（敬称略）

・西村貞子（家主）、西村義一（里山・棚田守り人の会顧問）、中川峯一（家主親類）、堀井登夫（前平尾自治会長）



西村家の畑から母屋を望む



土蔵



母屋正面の玄関と縁台



農具小屋



中央が西村貞子氏

その後浄水場から簡易水道を引き、砂でろ過した水を使用した時期もあるが、やがて上水道が

入口脇に一つ残るだけである。天水はすぐに干上がる。昔は溜池が枯れると、二・六キロも離れた山の湧水（現桜公園）まで水を汲みに行ったという。今では前面の車道の拡幅工事で小さくなった溜池が、入口脇の一つ残るだけである。

かつては西村家の屋敷内にも天水を溜めておく三つの溜池があり、中でも道路脇にあった二つの大きな溜池は近所の家と共同で利用し、畑の水やりや野菜の泥落としに使っていたようだ。今では前面の車道の拡幅工事で小さくなった溜池が、入口脇に一つ残るだけである。

三二一 水利用 三二二 溜池



道路脇の天水のため池（畑の水やり、野菜の土洗い用）（図6-B）

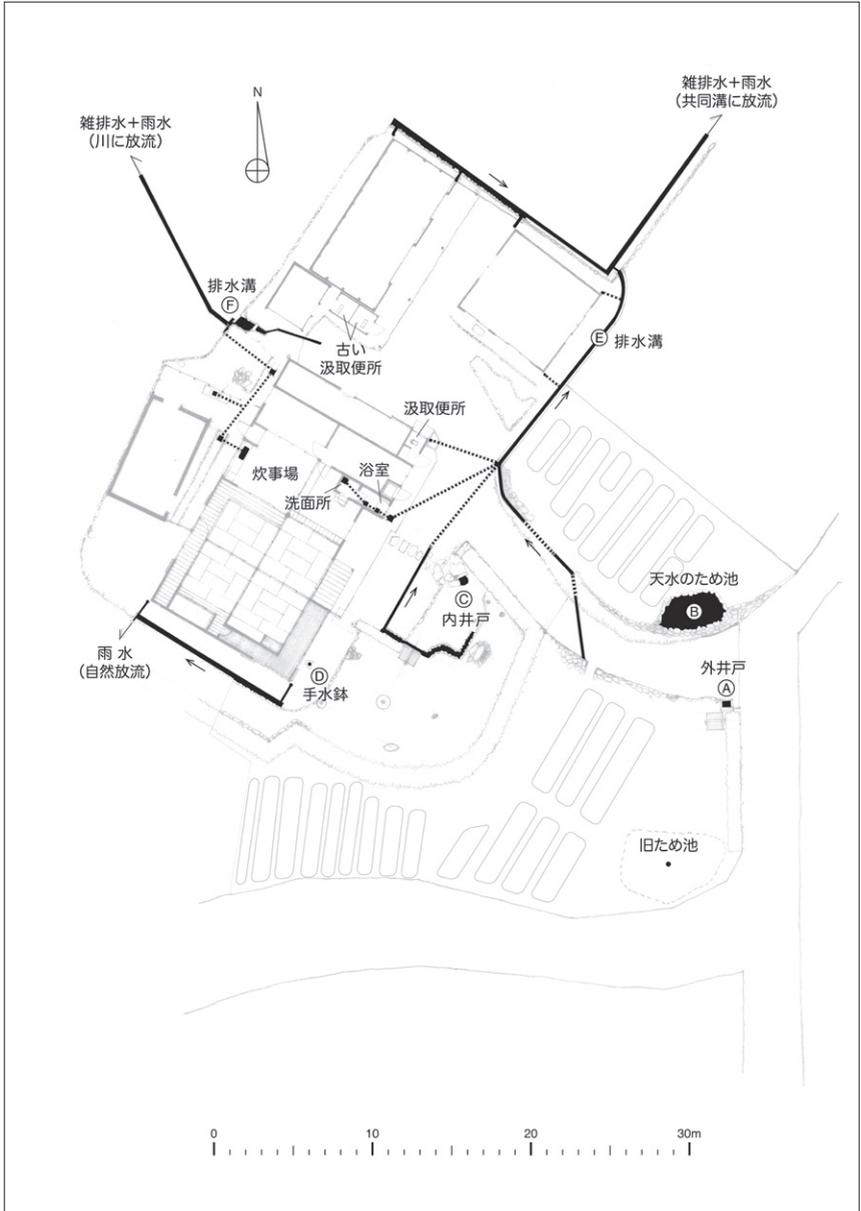


図6：西村家における水利用図



屋敷入口の外井戸（烟の水やり用）と地蔵（図6-A）



庭の内井戸（飲み水、風呂、炊事用）（図6-C）

完備して、生活用水は琵琶湖から供給するようになった。

三二二二 井戸

西村家には二つの井戸がある。道路の際、屋敷の入口脇にある井戸は、敷地内の溜池で泥を落とした後の野菜の仕上げ洗いをする場所でもあった。母屋の正面、築山庭園の中にある井戸は、つい最近まで釣瓶で水をくみ上げては飲料水や風呂の水に使っていたが、今では庭木の水やりだけになった。二つの井戸にはそれぞれ寄り添うように祠に納められた地蔵があったが、その後築山庭園の井戸を守る地蔵の方だけが現在の位置に移されている。西村家が深刻な水不足の時代を生き抜くことができたのは、この二つの井戸のおかげだと言う。

三二二三 汚水と生活排水

母屋の東の端にある便所は、昔も今も汲み取り式である。以前は、汲み取った汚物はすべて肥料として敷地内の畑に戻していたが、現在は健康上の理由からやめているという。また、「農具小屋」の南西の壁の外には二つの汲み取り便所が残っているが、現在は使っていない。

土間を改造する前は、現在浴室のある位置に五右衛門風呂があった。当時、この風呂は直接前庭に出られるようになっていたので、目の前の井戸から水を汲んで運ぶには便利だったという。

また、現在「炊事場」になっている北西の壁と風呂場があった南東の壁の真下に、昔は「スイモ」と呼ばれる、水をほかす（捨てる）穴が掘られていた。仕切壁の下には穴が開けられていて、家の中と家の外とがスイモによってつながっている。例えば炊事場で出た生活排水がスイモの中で一杯になると、外から汲み出して便所に運ぶのである。ほかし水は、便所で汲み取った肥料を薄めるのに使ったり、外に撒いたりして再利用したのである。



雨水と雑排水の排水溝（川に放流）（図6-F）



雨水と雑排水の排水溝（共同溝に放流）（図6-E）



庭の築山

三三三 植生
 三三三 築山庭園

道路に面した屋敷地の周囲は庭木も少なく、遠目にも開放的だが、屋敷内には、仰木の民家には珍しい築山庭園がある。この庭園はツバキ、サザンカ、センリョウと杉の混じる青々とした常緑樹の壁によって菜園と隔てられ、聖域としての屋敷地の中にもう一つの聖域を形成している。

築山庭園は屋敷地のほぼ中心に当たり、母屋の主要な二室（「ザシキ」「デ（デイ＝出居）」）に対面している。点在する多様な石の造形物と共に、西村貞子氏のご主人が生前に構想し、植木職人の力を借りて実現したものだ。今は亡き当家の主人の、この庭に寄せた熱い思いが伝わってくる。



母屋正面の庭の中心部。左手の石の手前に内井戸がある



悪気封じの石積みと柚子の木(図8-へ)

三二二 聖域をつくる庭木

屋敷地にはヒイラギとナンテンの木が目立つ。築山庭園内にもセンリヨウ、ヒイラギ、サカキなどの、古来より聖域としての庭を清浄に保つ役割を担ってきた庭木が目につく。「ザシキ」の上がり口である縁側の手水鉢ちぎょうの脇には、縁起物のマンリヨウ、センリヨウが植えられている。

門口にはナンテンが、母屋裏手の屋敷地境界部には、土蔵を挟んでカシ、モチノキ、杉などの高木が北西風を遮るよう植えられ、ナンテン、サザンカ、ツツジ、ツバキ、ユズなどの中低木が間を埋める。また母屋の納戸の裏手に当たる裏出口付近は、昔から敷地内を流れる雨水が集まるため、湿気のためやすい場所として忌み嫌われていた。そのため、ここには一本の大きなユズの木が植えられ、その根元には悪気封じの石が積まれている。



右手に地藏、奥に弁財天の石柱



築山庭園のセンリョウ

三四 信仰

三四一 石と庭園

西村家の築山庭園の比較的平坦な正面部には象徴的な石の配置が目につく。正面に向かって左手前、石で縁取られた井戸の背後に建てられた自然石の壁と、右手前の地藏の祠、そして水の守護神である「白龍・白姫弁財天」の名を刻んだ中央奥にある石柱とが、大きな三角形を構成している。

井戸の後ろには、五輪の塔をかたどった三つの石塔が、やはり小さな三角形を構成して配置されている。このうち中央一番奥に当たる「白龍・白姫弁財天」の石柱は、石を敷き詰めた基壇によって一段高いところに置かれ、この一画の中心的存在であることがうかがわれる。毎月一日と十五日になると、庭のサカキの木を切り、この石の祭壇の上に水、塩、線香、蠟燭と共に供える。

また築山庭園の右手、急な斜面の鬱蒼とした庭木の間にも、二つの手造りの石灯籠と二つの自然石の石塔が点在している。この石塔のうちの一つは、仙人の住む浄土の「蓬莱山」をかたどっているという。



「白姫・白龍」を刻んだ弁財天の石柱（龍は水の守護神）（図8-チ）



五輪塔をかたどった石塔群（図8-ト）



石塔（図8-ヌ）



石塔（蓬莱山）（図8-ヲ）



庭の地蔵（図8-リ）



石燈籠（図8-ワ）



石燈籠（図8-ル）

三十四 一 家の神と聖なる部屋

西村家の母屋は北東↘南西軸に配置されており、「玄関」と主要な二室は南東の前庭に面している。室内の平面構成は、南西にまとめられた、襖戸と障子戸だけで仕切られた畳敷きの四つの部屋（「ザシキ」「デ」「イマ」「ヘヤ」と、北東に広がる土間によって構成される、いわゆる「田の字型プラン」を原型としている。

高度成長期以降、生活環境の変化に伴い全国的に土間の風景が一変するが、西村家でも土間の一部に徐々に手が加えられ、新たに「炊事場」「子供室」「納戸」が設けられたのである。「炊事場」ができる前の土間には「オクドサン」と呼ばれる煮炊きするための大きな竈があり、火の神を祭っていたという。今も、ガスコンロの上の壁には火伏せの札がある。「炊事場」の裏勝手口脇には元三大師の札が張られ、七福神を納めた神棚にはサカキが供えられている。また、玄関を入ってすぐ右手の壁には泥棒除けと比叡山延暦寺の厄除けの札が張られている。

玄関土間の左手に張り出した縁を介して「デ」に上がると、長押の上には、神棚と祭に使う提灯を並べた棚がある。神棚の中には、比叡山とつながりの深い横川元三大師や覚性律師の札を始め、天照大神等の札と小さな木彫の神様が納められ、サカキが供えられている。

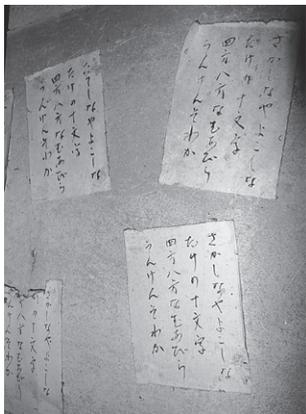
「デ」の奥には「ザシキ」があり、床の間と、天台宗の阿

弥陀仏を安置した仏壇とが、玄関のある土間の方を向いている。中でも「ザシキ」は最も神聖な部屋であり、「デ」とその奥の「ザシキ」の二室は、家の儀礼や接客のための特別な部屋として機能している。葬儀の際には「ザシキ」の南東の縁側が、僧侶の出入りと出棺のための通路となる。縁側下に置かれた石の手水鉢は、僧侶が「ザシキ」に上がる前に手を清めるためのものである。



寺の僧侶が手を清める手水鉢と、出棺のための縁側(図6-D)





泥棒除の札（玄関）（図8-ロ）



厄除の札（玄関）（図8-イ）



神棚に安置されている札（図8-ハ）



神棚（デ）（図8-ハ）



七福神の神棚（炊事場勝手口）（図8-ホ）



仏壇の阿弥陀仏（ザシキ）（図8-二）



デからザシキを見る



火伏せ（防火）の意をこめて書かれた母屋妻側の「水」の文字

三・五 結び

今回の調査は、仰木でも比較的古い住居形態をとどめる民家を選び、水利用、植生、信仰のそれぞれのカテゴリーについて行ったが、そのどれもが水を中心に互いに分かち難く結びつきながら、住居のコスモロジーを形成していることがわかった。

西村家の庭は、いわゆる名園ではない、ごく普通の庶民の庭である。だがこの庭の植栽景観をみると、その大部分が室町以来の回遊式庭園や江戸期の武家庭園、茶庭と共通の植物的水源である日本の照葉樹林的風土に根ざした植生によって構成されていることがわかる。

またわが国の住居配置には、古来より鬼門・裏鬼門に象徴される「不浄」なる領域や、門口、玄関、便所などの位置に対する強いこだわりがあり、特にナンテンやヒイラギなどの植物はこれらの場所や領域と分かち難く結びつき、魔除けの庭木として、屋敷地を「清浄」な状態へと変換するための役割を担っていたものと思われる。

また古来より、大きな石や特に目立つ形をした石は、自然界の神々を呼び込んでその内に宿す「依代よりしろ」であった。アニミズムと仏教的浄土思想とが混然一体となったこの築山庭園には、庭木と石を共に依代とする「楽園」としての死後の世界が象徴的に表現されていて、さながら水をめぐる祈りの楽園のようである。

このように、住居とは水や土地の記憶、家族や死者の記憶と

重層的につながった、豊かな表現世界でもあったのである。仰木の暮らしは、「中心（コスモロジー）」を喪失した今日の私たちの住文化の「貧しさ」と、大地（自然）から切り離された私たち自身の姿を浮き彫りにしている。

謝辞

二〇一〇年度近江学研究「里山と水と暮らし」第一期の共同研究者であり、本学近江学研究所研究員でもある永江弘之氏と加藤賢治氏には、本研究における学生への指導、研究活動へのサポート、研究の記録撮影等のご協力と心強い励ましをいただいた。また、本稿内にも記載した仰木在住の調査協力者の皆様には、調査地に関する情報提供や学生への対応等に多大なご協力をいただいた上、調査を温かく見守っていただいた。また本稿において、谷本研氏（本学情報メディアセンター）には、ご無理をお願いし、調査成果である図版データの編集をしていただいた。ここに感謝の意を表する。

宮座の祭礼

〈今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状〉

加藤
賢治

宮座の祭礼

今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状

加藤 賢治

Title :

A Festival of Miyaza

Summary :

This is a report of field research into the origin and history of the Nogami Festival (Nogami Matsuri) handed down from past generations to the inhabitants of Imakatata in Otsu City, Shiga.

はじめに

大津市今堅田二丁目に鎮座する野神神社に「野神祭り」と呼ばれる古式祭礼がある。この祭礼は、南北朝時代に遡るある一つの伝承に基づいて行われる「奇祭」として、今に受け継がれている。宮座研究の第一人者である肥後和男はその著書『近江に於ける宮座の研究』第二章宮座の種類―第一節「株座」において、野神祭りを執行する十二人による「野神講」を株座の一つとして、紹介している。ただ、現在は明治三〇年に十二人であったという講員の人数も減り、祭礼の担い手や祭礼そのものが変化している。

本論では野神講の講員による聞き取りや先行研究の分析を行い、現在の祭礼がどのように受け継がれ、執行されているのか、その全貌を論じてみたい。

先ず、ここではその伝承と歴史的背景を簡潔に述べておきたい。

大津市今堅田は、中世堅田庄の宮ノ切、東ノ切、西ノ切とともに堅田四方しほうを構成していた四つの「切」のうちの一つである。その今堅田にある野神神社には新田義貞義貞が寵愛した勾当

内侍^{註2)}の墓とされる石塚があり、祭神としている。

元弘元年(一一三三)五月、新興御家人である新田義貞が鎌倉を陥れ、足利尊氏が京都六波羅探題を攻めて、約百年間地位を築いてきた執権北条氏による鎌倉幕府は滅亡した。天皇親政の復活を目指し、倒幕を狙っていた後醍醐天皇はその時配流地の隠岐を脱出し、関白鷹司冬教、赤松則村、楠木正成らとともに六月、京に入った。そして、後醍醐天皇による天皇親政「建武の新政」が始まった。

しかし、この新政は発足後、所領問題や恩賞問題、公家と武家の確執など早くも内部崩壊の兆しが出る。天皇の皇子である大塔宮護良親王と鎌倉幕府の倒幕に最も貢献した足利尊氏との間に亀裂が生じ、そこに後醍醐天皇の子である懷良親王、恒良親王、尊良親王、新興武士の新田義貞などが戦渦にまみれることとなる。

建武二年(一一三五)、執権北条氏の残党北条時行が尊氏の弟直義が占領する鎌倉を攻めた(中先代の乱)。尊氏はその乱をきっかけに兵を整え、後醍醐天皇の命を待たずに軍を東に向けて反旗を翻したのである。天皇は新田義貞や北畠顕家、楠木正成などの武将に尊氏追討を命じた。戦いは二転三転し、尊氏は一旦九州に落ち延びるが、各地の武将を味方につけ再び上京、途中湊川で楠木正成を討ち再び京都に入って持明院統の光明天皇を即位させ、後醍醐天皇に抵抗した。ここに「建武の新政」は崩壊し、大覚寺統の後醍醐天皇(南朝)と尊氏が擁立した光

明天皇(北朝)が対立する南北朝時代に突入した。そして、延元三年(一一三八)、後醍醐天皇を支持する息子の尊良、恒良両親王や武将の新田義貞、北畠顕家ら南朝側の中心人物らが尊氏率いる北朝軍に次々に破れ散っていったのである。

今堅田での伝承によると、新田義貞が京都での足利尊氏との戦いに破れ、越前へ落ち延びる時、勾当内侍を家臣とともに今堅田にとどめ、再会を誓った。しかし、義貞は延元三年(一一三八)閏七月二日越前藤島郷において戦死した。その計報を聞いた勾当内侍は悲しみのあまり今堅田琴ヶ浜に身を投じ非業の死を遂げたという^{註3)}。

その亡骸を手厚く弔ったという村人たちの子孫と伝えられる野神講の講員によって野神神社の祭礼「野神祭り」が行われてきた。

第一章 野神講

1-1 野神講の歴史

野神講の講員に伝わる平成十八年(二〇〇六)にまとめられた「勾当内侍廟 野神社社之略記」(表1)によると、延元元年十月、新田義貞は後醍醐天皇の勅旨を受け、越前に向かう際、この今堅田の地に内侍を留めた。延元三年(一一三八)七月二日、勾当内侍は義貞が越前藤島郷で戦死したと聞かされると、悲哀の極みとなって同年九月九日夜、琴ヶ浜で身を投じて命を

断った。村人はその亡骸を今堅田に移して墓をつくって弔った。内侍の没後一五〇年に当たる明応六年（一四九七）九月、墓の上に社を建て、神祇管領長上である卜部兼俱によって野神神社と称されるようになった。以後二〇数軒の氏神と崇められ、氏子たちは毎年九月九日夜（旧暦）例祭を行うようになった。

この地は近世には勾当内侍の菩提所である堅田泉福寺の影響を強く受けるようになる。内侍の葬儀が行われた際、その導師を務めたのが泉福寺の明導で、野辺送りを行ったが、そのときに参列した浦人二〇数名が後に泉福寺も含めて野神講をつくったとされている^{〔註1〕}。しかし、弘化三年（一八四六）の「野神大明神御神事講衆次第」によると安永四年（一七七五）に、泉福寺は野神講を退講し、絶えず行ってきた九月の法要は実施されなくなったと伝えられている。

ただ、五〇年に一度の遠忌は泉福寺で行われてきた。江戸時代後期にあたる天保七年（一八三六）になると泉福寺で内侍没後五〇〇年祭が執り行われ、明治十六年（一八八三）には五五〇年祭という例大祭が行われた。昭和十三年（一九三八）には六〇〇年祭が行われ、野神神社神域造営期成奉賛会を結成募金活動（事業費一六〇〇円）が行われ境内参道の拡張、石鳥居、社務所が建築された。平成十二年（二〇〇〇）には、六五〇年式年祭を執行。記念事業として寄付を募り（寄付件数一六七件）、社務所の改築、境内の植樹と整備、公道拡幅に際して勾当内侍廟道碑を社頭に移す。（写真1）



写真1 勾当内侍廟道碑

野神講の運営については、昭和二〇年（一九四五）、同じく今堅田の伊豆神田神社に合併し、野神神社は伊豆神田神社の境外社となったことで、平成十八年（二〇〇六）から伊豆神田神社の氏子が講の祭礼を引き継ぐことになり、この年四月から野神神社の「内侍祭」並びに諸事管理については伊豆神田神社氏子総代が当たることとなった。これによって六〇〇年続いていたと伝えられる野神講中は解散となった。

野神講の講員数については、元和元年（一六一五）の『野神講文書』「今堅田村御神事衆覚」に、「惣合廿九人也」と記され、二〇九名全講員の名前が記されている。（写真2）野神講は閉鎖性の強い株座であると言え、その後徐々に講員数が減って



写真2 『野神講文書』〔今堅田村御神事衆覚〕

く。先述の「勾当内侍廟 野神神社之略記」の記録によると、

寛文元年（一六六一）「御神事衆 惣合廿七人也」

元禄十二年（一六九九）「御神事講衆 人数頭合廿六人也」

宝曆九年（二七五九）

「野神大明神 御神事衆 人数合廿四人也」

弘化三年（一八四六）

「野神大明神 御神事講衆 人数二十人」

明治十六年（一八八三）「野神講中 人数十二人」

昭和十年（一九三五）「野神講中 人数十二人」

平成二年（一九九〇）「野神講中 人数十一人」

と記され、今堅田村の中での講員の比率は元禄三年（一六九〇）の「今堅田村検地絵図」の総戸数が一〇七とされており、元禄十二年の講員が二十六名であるので、四分の一弱が講員であったことがわかる。最も多い時には二九名を数えた講員は十一人まで減り、平成十八年（二〇〇六）に講中は解散となり先述の通り伊豆神田神社の氏子が古式例祭を引き継いでいる。

(表1) 「勾当内侍廟 野神社之略記」

延元元年 (一三三六)	十月、新田義貞は後醍醐天皇の勅旨をうけ、越前に下向の際、今堅田に妻である勾当内侍を留め置いた。延元三年(一三三八)七月二日に越前藤島郷で義貞が戦死し、その訃報を耳にした内侍は悲しみのあまり同年九月九日夜、身を湖水に投じた。亡がらは村人たちによって祀られた
明応六年 (二四九七)	卜部兼俱によつて野神社と称されるようになる。
享祿三年 (一五三〇)	後奈良天皇から懐旧の御歌と祭祀料を下賜される。
永祿十二年 (一五六九)	兵火と数回の水災で祭神の遺品等散逸する。
元禄十一年 (二六九八)	今堅田村、三上藩主遠藤胤親の藩領地となる。
享保十五年 (一七三〇)	勾当内侍廟道碑講員二五人で建立。
宝暦十一年 (一七五九)	今堅田村領主三上藩遠藤備前守領知分 野神大明神持高一石七斗八升七合
安永四年 (一七七五)	華光院前勾当内侍菩提所「泉福寺」断りに依り神事衆を除く。

天保年間 (一八三〇) 一八四三	泉福寺の住職明覚が野神社の神紋を勾当内侍の実家である持明院の家紋に定める。
天保七年 (一八三六)	華光院前勾当内侍の五〇〇年祭を同村泉福寺に於いて執行、日野大納言資愛卿と三上藩主遠藤胤緒但馬守より祭祀料を寄進される。正四位下国学者上賀茂神社祠官、加茂季鷹の碑文を撰して、石碑を境内に建つ。
明治六年 (一八七三)	太陽暦(新暦)に改暦され、例大祭を十月八、九日に行ふことに改める。
明治十六年 (一八八三)	華光院前勾当内侍の五五〇年祭を同村泉福寺にて執行、近村より老若群集し、今堅田村、開創以来の法要が行われる。
明治二九年 (一八九六)	大風水害に遭う。内侍廟、墓所が流失し甚大な被害を被る。
明治三五年 (一九〇二)	勾当内侍廟、改修資金募集と廟の改修を行う。
昭和十三年 (一九三八)	華光院前勾当内侍の六〇〇年祭を執行、記念事業として野神社社神域造営期成奉賛会を結成し、奉賛会本部を堅田町役場に置き、会長の堅田町長佐久間徹氏のもとに募金活動(事業費一六〇〇円)と、境内参道の拡張、石鳥居、社務所を建築する。
昭和二〇年 (一九四五)	伊豆神田神社と合併し、野神社は伊豆神田神社の飛び地境外社となる。

昭和五四年
(一九七九)

「内侍祭り」の行事次第を変革し、二日間の日時を短縮して、祭礼を一日間とするに改める。

平成十二年
(二〇〇〇)

この年、華光院前勾当内侍の没後六六三年にあたるが繰り下げて六五〇年式年祭を執行。記念事業として寄付を募り(寄付件数一六七件)、社務所の改築、境内の植樹と整備をする。公道拡幅に際して勾当内侍廟道碑を社頭に移す。

平成十八年
(二〇〇六)

伊豆神田神社と統合し、飛び地境外社となつていくことから、伊豆神田神社の氏子が奉祀を引き継ぐこととなる。この年四月から野神神社の「内侍祭」並びに諸事管理については伊豆神田神社氏子総代が当たることとなった。これに依り野神講中は解散となった。

一・二 野神講による祭礼「野神祭り」

かつて存在した野神講の祭礼として行われていた「野神祭り」については、肥後和男^{〔註5〕}、井上頼寿^{〔註6〕}、小栗栖健治^{〔註7〕}による研究報告によって知ることが出来る。

特に小栗栖氏による昭和五三年の調査^{〔註8〕}は非常に詳しく当時の様子が記録されている。以下に紹介し、現在のものと比較してみたい。

①祭りの特徴

野神講中における祭礼は例年九月十八日と十月八日、九日に

行われ、俗称「きちがい祭り」と呼ばれた奇祭である。このように名付けられた所以は、「お渡り」という行事において祭礼の中心である当屋が新当屋(受当屋と呼ぶ)にめぐけて神饌が盛られた膳を投げつける、また、その夜に行われる松明行列の際、行列に参加する講員が「城門じゃ、火事じゃ、火事じゃ」と大声で叫び、行列が家の前を通過するときに表戸が閉じてあると戸を叩いて開けさせるなどの行いによるものと考えられる。

野神祭りは野神講や勾当内侍の菩提寺である泉福寺に伝わる史料から「野神大明神御神事」、「内侍神事」、「九月遠忌」というかたちで三つの性格を持つ。すなわち、今堅田の野神という「田の神」へ五穀豊穣を祈願すること、非業の死を遂げた勾当内侍の霊を鎮めるということ、そして内侍の菩提寺である泉福寺が追善供養を行うということである。

②祭りの次第

(ア)内侍塚の泥塗り

九月十八日午前十時三十分、当屋と受当屋が野神神社に参拝し、野神神社の御旅所である「琴ヶ浜」^{〔註9〕}にて水と泥を採取。その後、野神神社に戻り、勾当内侍の塚の九つの石を清めた後、取り除き、円丘状に採取した泥を塗る。この日は泥塗りのみ行い、十月八日の本祭りまで放置される。

(イ)当屋の準備

十月八日の午前八時三十分ころ講員が当屋に集まり、しめ縄、神饌の準備を行う。しめ縄は、大鳥居や中鳥居、社殿の

周辺の瑞垣、勾当内侍の塚の石冊、内侍の石碑、手桶、小唐櫃、大唐櫃に使用する。神饌は、二組つくり、一組は神酒・洗米、塩・水、大根・人参、するめ、梨五個、昆布、菓子、鯉一匹、鏡餅一重で、三方とともに大唐櫃に納める。もう一組は、よく煮た大豆と海老を取り合わせた膳を四膳、小さな鯉二匹を一組にして箸一本をつけ、紅白の水引で縛ったにらみ鯉を二膳、御幣のついた神を六膳用意し、「当渡し」の行列で六人の膳持ちが分担して持つ。また、三メートル程の青竹二本をくくり合わせ、その上に御幣をつけた「竹の御幣」をつくる。そして、当屋と受当屋が小唐櫃、大唐櫃の封印を行う。

(ウ) 野神社社参拝

十月八日午前十一時ごろ、当屋に講員や親類が野神社社参拝の準備を行い、神饌を入れた大唐櫃を先頭に神職、当屋、他の講員十二名の行列が、太鼓の音に送られ野神社へ向かう。神社で神事が行われる。大唐櫃に入れられた神饌が三方に盛り供えられ、講員の手送りによつて神前に献じられる。そこで、神事が行われる。神前では新旧の当屋が拝礼し、続いて神職のお祓い・祝詞奏上、当屋・講員が玉串を献上し神事は終了。神饌は大唐櫃に納められる。その後再び当屋のもとへ戻り、全員がそろくと直会を告げる太鼓が鳴り、酒宴がはじまる。酒宴の途中に当屋は床の間の「野神大神」の軸を巻き納め、当屋が受当屋に軸を渡す。受当屋は自分の家に帰

宅し、掛け軸を掛ける。受当屋の準備ができたのでそれを告げる使者が当屋宅へ向かう。

(エ) お渡り

十月八日午後一時、受当屋から使者が当屋に到着する。急遽直会が中止となり、受当屋への「お渡り」の行列が出発。先頭は当屋で神の葉を口に含み、勾当内侍の遺品が納められている小唐櫃を持つ。続いて神職、竹の御幣、神饌を納めた大唐櫃、大太鼓、六人の膳持ちという順番で受当屋を目指す。行列は受当屋の手前で一旦止まり、小唐櫃を持った当屋と六人の膳持ちのみが残り、それ以外は受当屋の家の中に入る。受当屋は小唐櫃を迎えにいき、それを受け取ると一目散に走り帰る。六人の膳持ちたちは、それを追いかけるように受当屋をめざし、行列を出迎える受当屋の家族や関係者に向けて膳を投げつける行事がおこなわれる。下に落ちた鯉や海老、豆などは出迎えた人たちが拾い「お渡り」の行事は終了する。受当屋の家の中では「とう渡し(受け)の盃」が行われる。受当屋の座敷の床の間には、当屋から移された「野神大神」の軸が掛けられ、神酒・洗米・水と夜の松明行列の時に用いる神饌(広蓋)が供えられる。広蓋には神饌である小餅十二個・柿十二個・栗十二個・枝豆十二本が入っている。講員は当屋を中心に座り、当屋が「お渡り」の無事感謝する挨拶を行い、受当屋は三方に洗米・神酒・杯を載せ当屋に杯をすすめる。受当屋は一旦席に戻り、当屋を受ける挨拶をし、元

の当屋から「とう渡し（受け）の盃」を受ける。そして講員が順に盃を受けて神事は終了する。

(オ) 松明行列

十月八日午後八時三〇分ごろ当屋の床の間の灯明から松明へ火が移され、旧当屋から移された長い竹の御幣を持つ新当屋、神職、松明や神饌を持った講員、火消しの桶を持った少年二人の行列が当屋の家を出発する。行列は「城門じゃ、火事じゃ、火事じゃ」と大きな声を張り上げ、御旅所の「琴ヶ浜」へ向かう。「琴ヶ浜」に到着すると、手桶一杯の湖水を汲み取り行列は勾当内侍塚へ向かう。野神神社に到着すると、先頭の新当屋は参道右横の田圃に入り竹の御幣を突き刺す。

この竹が深く刺さるほど次年度が豊作であるといわれ、また、琵琶湖の水位を占うという意味もあるといわれている。

その後、社殿の内侍の塚へ移動し塚の九つの石を元になおし、湖水で清め、神職が祝詞を奏上、次に伊豆神田神社に向かい同じく祝詞奏上。両社の参拝を終えた松明行列は「城門じゃ、火事じゃ、火事じゃ」という叫び声をあげるながら村内を一巡し、当屋に帰着して松明行列は終了する。

(カ) 灰葬まいり

十月九日午前十時ごろ新旧当屋が紋付羽織袴姿で野神神社の締めくくりの参拝を行う。

第二章 現在の野神祭り

二一 伊豆神田神社の氏子と祭祀

既述のとおり平成十八年から「野神祭り」は野神講の講員から伊豆神田神社の祭祀として氏子の代表が代わって執行するようになった。この理由としては、野神講の講員のみでは講員数の減少や高齢化で祭祀の運営が難しくなってきたという事と、伊豆神田神社の氏子が、この地域に伝わる新田義貞の妻勾当内侍の伝承や「当渡し」や「松明行列」に見られる珍しい習俗等を後世に残そうとしたことによる。

既に、野神神社は昭和二〇年に伊豆神田神社と合併しており、飛び地境外社となっていた事実もあり、伊豆神田神社の氏子が野神神社の祭祀を継承することとなった。

伊豆神田神社の由緒によると、当神社は貞観二年（八六〇）に伊岐宿禰是雄が堅田浦の関屋浜に神田神社を勧請し、昌泰三年（九〇〇）に伊豆神社を合祀したと伝えられている。伊豆神田神社の氏子は現在今堅田一丁目（旧出島^{（出島）}）南町・嶋町・仲町・西町を中心として二〇戸となっている。一年を通じての祭祀は一月一日「元旦祭」、一月十五日「還暦報告祭」、二月十七日「祈年祭」、四月二十日「例祭」、五月中旬「五穀豊穰祭」、十一月三日「秋大祭」があり、それらとは別に野神神社の祭祀として十月の第三日曜日「野神神社例大祭（野神祭り）」が行われ、伊豆神田神社の祭祀に比べ最も規模が大きな祭祀と

なっている。祭礼の運営は宮総代八名（任期三年）が中心となり、神職^{〔註1〕}一名と相談役、今堅田理事等が加わり、祭を支える。

二二二 伊豆神田神社の氏子による「野神神社例大祭」

（野神祭り）

「野神神社例大祭（野神祭り）」は、野神講中で行われていた神事の全貌が詳細に引き継がれているわけではないが、できるだけ今に伝わっている習俗を残しながら継承されている。

平成二三年九月十一日午前九時半からこの年度の「野神祭り」の初めての打ち合わせが伊豆神田神社の社務所で開かれ、宮総代八名のうち出席できるものが集まった。宮総代の代表者から資料に基づいて今年度の祭礼の説明があり、ある程度詳しい執行に際する手順が紹介された。当日の資料の一部を以下（表2）で紹介する。

（表2）― 秋祭り・野神神社例大祭スケジュール ―

九月十一日（土） 九時半	伊豆神田神社に宮総代全員集合、宮掃除の後、事前打ち合わせ
九月二十五日（日） 九時	伊豆神田神社に宮総代全員集合、宮掃除の後、塚の泥塗り

十月八日（土）
九時

伊豆神田神社に宮総代全員集合、宮掃除の後、ポスター掲示↓南町・西町各4ヶ所 嶋・仲2ヶ所 買い物手配（詳細省略）

十月十五日（土）
九時

野神神社に宮総代全員集合、準備・掃除（境内・社務所・公民館）、しめ縄一式・幕取り付け・小唐櫃の張替 公民館・琴ヶ浜提灯吊り下げ等

十月十六日（日）
八時

野神神社に宮総代全員、祭礼執行役員全員集合、袴着替え↓野神神社社務所にて（お渡り者のみ 評議員・宮総代相談役はスーツに陣羽織）

十時

式典 参列者（招待者・運営委員・宮司）

十時

参拝受付 志納者・一般者

十一時

お渡り 野神神社より町内へ

十二時

直会 公民館にて（招待者・運営委員・宮司）

十八時

夕食 招待者・運営委員・宮司

二〇時

松明行列 運営委員・宮司

十月十七日（月）

九時

野神神社に宮総代全員集合、献饌 志納金整理・礼状配布・献饌物配布

平成二三年度に執行された「野神神社例大祭（野神祭り）」の記録を、昭和五三年に行われた野神講中による祭礼と比較す

るため前掲の(ア)から(カ)の項目に合わせて以下に報告する。

(ア) 内侍塚の泥塗り

九月二十五日(日)午前九時に伊豆神田神社社務所に宮総代全員が集合。伊豆神田神社の掃除を済ました後、勾当内侍の塚に塗るための泥を採取するため、宮総代表と次期宮総代表が野神神社の御旅所である「琴ヶ浜」に向かう。他の宮総代は野神神社の清掃へ向かう。琵琶湖の最狭部である今堅田琴ヶ浜で琵琶湖大橋を背後に泥を採取した後、野神神社に向かう。神社到着後、社殿の奥にある内侍塚へ。宮総代表が九つある人頭大の石を丁寧に塚から下げ、採取した泥を塗る。

※野神講中による祭礼との比較〔証五〕

講中で行われていた日程よりも一週間遅れての泥塗りの神事となっている。講中では当屋と受当屋が行っていた役割を伊豆神田神社の宮総代表と次期代表が行っている。それ以外のかたちは本来のものと変わっていない。



①今堅田琴ヶ浜で泥を採取する宮総代表



②泥をバケツに入れる宮総代表とバケツを持つ次期代表



③野神神社前にて泥を運ぶ宮総代



④野神神社社殿の奥にある勾当内侍の塚 九つの石が並ぶ



⑤宮総代代表が丁寧に石を塚から降ろす



⑥泥塗りを終えた内侍塚

(イ) 当屋の準備

十月十五日(土) 午前
九時野神社社務所に宮
総代全員と相談役が集合。
先ず野神社社の境内、社

務所、今堅田公民館、伊
豆神田神社の境内の清掃
を行う。その後、明日に控
える例大祭の準備を行う。

しめ縄一式の取り付け
は大鳥居、中鳥居、社殿
の瑞垣、内侍塚の石冊、
内侍の石碑、小唐櫃、大
唐櫃など様々なところに
つけられる。また、社務
所入口には平成五年に野
神講中竹内伝右工門氏か
ら奉納された紋入りの幕
が飾られた。同時に神饌
その他供え物の準備が行
われる。野神社社での式
典の神饌は、神酒五合、
鏡餅一式(二重)、乾物

一式(昆布・スルメ)、果物(リンゴ)二三個(参列者分含む)、
饅頭二三個(参列者分含む)、野菜(大根・人参)、鯉(現在
はケンサクスルメを代用)、柿十組(玉串分一組合含む)、洗米
(適量)、塩(適量)。今堅田公民館床の間の祭壇用に、灯明
一式、神酒・洗米・塩(大唐櫃に積み込み式典から移動させ
る)、柿、「野神大神」掛軸を準備する。当渡しのお膳として、
弊がついた柿(一本)二膳、ケンサクスルメ(三枚)二膳、
蛭豆三膳、参列者に配布用蛭豆五膳を準備。松明行列用の塚
前の神饌として、塚前用の柿一对、柿三〇個、栗三〇個、枝
豆三〇個、餅三〇個、白蒸し一盛りを、灰葬参り用の塚前神
饌として、柿八個、栗八個、枝豆八個、餅八個が用意された。
また、一般参拝者用にスルメおつまみ二袋、神酒適量を準備。
三メートル程の青竹二本をくくり合わせ、その上に御幣をつ
けた「竹の御幣」をつくる。そして、宮総代代表と次期代表
が小唐櫃、大唐櫃の確認を行って例大祭の準備は終了した。
※野神講中による祭礼との比較

祭礼の運営が伊豆神田神社の宮総代に移ってから当屋は
置かれなため、当屋で行われていた祭礼は省略されてい
る。よって、準備は例大祭当日の前日に行われ、準備の場
所は野神社社の社務所となっている。神饌の種類は鯉がケ
ンサクスルメに変わるなど、多少変わっている。また、当
渡しで使われる蛭豆は小さいビニール袋に入れてあり、地
面に落ちてでも食べるよう配慮されている。

(ウ) 野神社社参拝

十月十六日(日) 午前八時運営委員全員が野神社社務所に集合。宮総代は袴に着替え、評議委員と相談役はスーツの上に白の陣羽織を着用する。簡単な準備をし、一般参拝者の受付をする。一般参拝者には蛭豆煮と神酒一杯、つまみを渡す。午前十時に式典が開始される。参列者は運営員全員十八名、宮司一名、招待者四名(大津市市会議員一名、大津市農業委員一名、今堅田農業組合長、今堅田土地改良区理事長)。参列者全員の記念撮影の後、社殿前にて式典が行われた。

式典の進行は宮総代代表が行い、参進↓修祓↓宮司一拝↓献饌(社務所に準備された三方に載せた神饌を宮総代全員で社殿に手渡しで運ぶ)↓祝詞奏上↓玉串拝礼(伊豆神田神社宮総代代表・今堅田自治会長・大津市市議会議員・大津市農業委員・今堅田理事二名・今堅田農業組合長・今堅田土地改良区理事長の順で玉串が奉納される)↓撤饌↓宮司一拝と進み最後に宮総代代表が終了を告げる。その後、堅田和太鼓クラブによって野神太鼓が奉納された。

※野神講中による祭礼との比較

当屋を置かないため、野神社社に直接関係者が集合し、社殿前で例大祭の式典が行われる。式典後は当屋が設定されていた講中での祭礼では、一旦当屋の家に戻って直会として宴が行われるが、現在ではその宴は省略され、「お渡し」と称した行列が発する。



①提灯やしめ縄が飾られている大例祭当日の野神社



②野神社の社務所入口の紋入り幕



③野神神社社殿



④三方に盛られた式典用の神饌



⑤式典前の記念撮影



⑥宮司による修祓（しゅばつ）



⑦社務所から手渡しで献饌の準備をする宮総代一同



⑧献饌の後、祝詞を奏上する宮司



⑨玉串拜礼



⑩堅田和太鼓クラブの奉納太鼓

(エ) お渡り

十一時二七分(予定では午前十一時)「お渡り」の行列が野神社を出発した。

先頭は勾当内侍の遺品を納めた小唐櫃「註」を捧げ、不浄な息がこの小唐櫃に当たらないよう口に榊の葉を加えた宮総代表である。続いて神職(宮司)、「竹に弊」を持つ今堅田理事、「野神大神」掛軸を持つ宮総代、太鼓を持つ今堅田評議員二名、神饌が入った大唐櫃を持つ今堅田評議員二名、膳(榊に弊)を持つ宮総代二名、膳(鯉↓現在はケンサキスルメを代用)を持つ今堅田理事二名、膳(蛭豆)を持つ宮総代三名、と続き行列の最後は招待者である大津市市会議員一名が務めた。

行列は野神社を出て、十一時三〇分、今堅田公民館の前を通り、伊豆神田神社の東側を通過、今堅田一丁目を中心に町内を巡回する。巡回の最後に近い御旅所「琴ヶ浜」に立ち寄ったのが十一時四四分、最終目的地の今堅田公民館には十一時四八分に到着した。



図1

行列が到着すると、あらかじめ公民館に待機していた次期宮総代代表が、宮総代代表から小唐櫃を受け取る行事が行われる。当然次期宮総代代表も袖を口にくわえている。小唐櫃は勾当内侍の遺品が納められているというが、この祭礼において最も神聖な物であることは間違いない。

次期宮総代代表が小唐櫃を公民館二階の床の間に安置、神酒・洗米・水が供えられ、「野神大神」の掛軸と「竹の弊」を掲げられると、公民館の前では神饌が盛られた膳を投げつける行事が行われる。

この行事は野神祭りが、かつて「きちがい祭り」と呼ばれた所以となる奇行が行われる。行列の後半を歩いていた膳持ちが、公民館で待機していた膳受け人(今堅田評議員二名)に、神饌が盛られた膳とともに投げつけるといふものである。ケンサキスルメや蛸豆が順番に膳ごと投げつけられた。

この後、運営委員全員が公民館の二階に上がり、小唐櫃が安置してある床の間に全員が参拝し、着座。宮総代代表が口上を述べ、お膳請け人(膳投げで膳を受けた今堅田評議員二名)が神酒を座人に酌をする。その後、次期宮総代代表が代表になる決意表明をして神事が終了した。

その後、袴から平服に着替えて直会が行われ、和やかに会食が行われた。

※野神講中による祭礼との比較

野神講中による「お渡り」は、当屋の家から受当屋の家

へ行列を組み、この祭礼で最も神聖である勾当内侍の遺品が入った小唐櫃を渡すという神事である。

現在は当屋と受当屋を設定せず、直会を含む神事はすべて今堅田公民館で行われている。従って「お渡し」の行列は野神社を出て、町内を一周し、御旅所を回って公民館に入るという行程をたどる。(図1)ただ、当屋の役割は伊豆神田神社宮総代代表が務め、受当屋の役割は次期宮総代代表が務めており、小唐櫃を「お渡し」する際は兩人とも口に榊の葉を含むなど、古式を守っている。

膳を投げつける行事は、以前は受当屋の家の前で行われ、膳を受ける受当屋の親類等に投げつけた様であるが、今は投げつけるというよりは上へ向かって放り投げるような仕草となっている。また、地面に落ちた蛭豆も食べることができるよう、ビニールの袋に入れて小分けにしてあるなど、一般参拝者への配慮がされている。



①小唐櫃を先頭に「お渡し」行列出発



②神饌が入った大唐櫃



③お膳持ち



④ビニール袋に小分けされた蛭豆



⑤伊豆神田神社の前を通過する行列



⑥今堅田の路地を巡回する行列



⑦野神神社の御旅所「琴ヶ浜」を示す提灯



⑧野神神社の御旅所「琴ヶ浜」を示す提灯



⑨今堅田公民館前で宮総代表が次期代表に小唐櫃を手渡す



⑩お膳持ちが膳とともに神饌を投げる



⑪膳と神饌を高く放り投げる膳持ち



⑫投げつけられた蛸豆を拾う一般参加者



⑬何度も投げつけられ補修された膳



⑭公民館の二階で「野神大神」の掛軸と小唐櫃に参拝する参列者



⑮口上を述べる宮総代代表 奥中央が次期代表



⑯神酒を受ける参列者



⑰床の間に安置された小唐櫃・洗米・神酒・神・塩・水・灯明



⑱公民館二階床の間 中央に「野神大神」の掛軸



⑲和やかに行われた直会

(オ) 松明行列

午後六時に運営委員全員が野神神社社務所に集合し、夕食をとる。その後、松明の準備が整うと、午後八時三〇分(予定では八時)、松明行列が神社を出発する。行列の先頭は「竹の御幣」を持った宮総代代表。代表のみが袴を着用している。続いて宮司、琴ヶ浜にて水を汲む手桶を持った今堅田理事、その後は松明を持った運営委員が続く。松明の順は宮総代七名、今堅田理事二名、今堅田評議員六名と続く。松明行列の総勢は宮総代代表らも入れて十八名である。

行列の順路は「お渡り」と全く同じで、途中野神神社の御旅所である「琴ヶ浜」に立ち寄る。行列は出発して間もなく「城門が火事や」と何度も大声で全員が繰り返し叫ぶ。これは既述の「お渡り」の「膳投げ」とともに野神神社が奇祭と言われる所以となっている。

行列が八時五三分、「琴ヶ浜」に到着すると、「水汲み」が宮総代代表と担当の今堅田自治会長によって行われ、終了後、野神神社の内侍塚を目指す。

野神神社に九時三分、行列が到着すると、すぐに宮総代代表が「竹の御幣」神社の敷地内にある

定められた一角に突き刺す。その後、内侍塚に行き、宮総代表が泥塗りの後、そのままにしてある九つの石を元の状態に積み直し、手桶に汲んできた「琴ヶ浜」の水で清める。

同時に、塚の前に柿と柿、栗、枝豆、餅、白蒸し（おこわ）といった神饌を捧げ、最後に宮司が松明の明かりに囲まれ、神聖な雰囲気の中で、新田義貞の妻勾当内侍の悲話とこの地の先祖が内侍の亡骸を手厚く葬ったという故事を語り、祝詞を奏上して九時十五分、祭りは終了した。

松明行列は地元の一般参拝者も参加し、終了後、神饌が配られた。

※野神講中による祭礼との比較

野神講中では当屋（「お渡り」では受当屋。松明行列に置いては当屋となっている）の床の間の灯明を松明に移し、神饌を等の供え物とともに行列が発する。現在は「お渡り」と同じく当屋がないため、野神神社を發着とし、神饌も社務所に用意されている。

昭和五三年の調査では二人の少年が火消しの桶を持って随行したようであるが、現在は松明から、火のついた木屑等が落ちなくなっているため、その随行はない。

行列者全員が叫ぶ「城門が火事や」という言葉は、当時「城門じゃ、火事じゃ、火事じゃ」と叫んでいた。また、「竹の御幣」を突き刺す神事については、もとはこの祭礼を支えていた講員共有の神田に突き刺していたという事である

が、現在は敷地内の「竹の御幣」を刺すための特別な場所に刺すことになっている。この役は宮総代表が務めるが、当時は新当屋がその約を担っていた。これは「お渡し」の神事がはつきりと新旧当屋の入れ替えを意味していたため、「松明行列」は新当屋が中心となる神事との認識があったと考えられる。現在はこの点が曖昧となっており、「お渡し」も「松明行列」も一連の行事と考えられ、すべて宮総代表が担当している。

御幣を神田に刺していた当時は、御幣が深く刺されば刺さる程、次年度の豊作につながり、また、明治二九年の水害でこの御幣まで琵琶湖の水位が上がったとの言伝えがあり、厄難回避の祈念も込められていた。

その後の塚の清めや宮司の祝詞奏上は変わらないが、昭和五三年の調査時は、祝詞奏上の後、伊豆神田神社に向いて宮司が再度祝詞を奏上し、新当屋に戻って行事は終了する。



①夕食をとりながら松明行列を社務所で待つ祭りの運営委員



②竹の御幣を先頭に野神社を出発する松明行列



③「城門が火事や」と叫びながら今堅田の町を歩く松明行列



④御旅所である琴が浜で清めの水を汲む



⑤御旅所で清めの水を汲み野神社に向かう



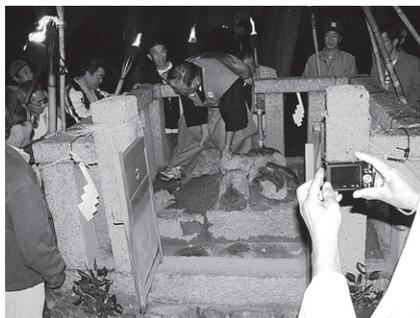
⑥行列が野神社に帰る



⑦宮総代表によって神社の敷地内に刺された「竹の御幣」



⑧堅田小学校の敷地内にある明治二十九年の大洪水の標識 標識上の線が当時の水位という



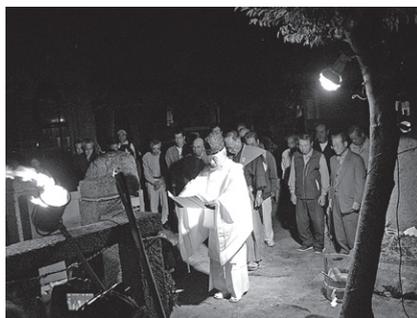
⑨宮総代表が丁寧に内侍塚の石を戻す



⑩琵琶湖の水で清められた内侍塚の石



⑪松明に囲まれ祝詞を奏上する宮司



⑫松明に囲まれ祝詞を奏上する宮司

(カ) 灰葬まいり

十月十七日(月)、宮総代全員が野神社社務所に集合。

献饂等の参拝を行い、その後、志納金の整理や札状の配布、柿栗、枝豆、餅等の献饂物の配布、後片付けをして終了し、一同会して飲食店で昼食をとり解散となる。

第三章 株座から村座へ

三一 株座と村座

野神祭りに見られるような、野神講中や伊豆神田神社の氏子組織に見られる祭礼は、いわゆる「宮座の祭礼」と呼ばれ、様々な研究者がその研究対象としている。その先駆者は一九三八年の『近江に於ける宮座の研究』、一九四一年の『宮座の研究』を発表した肥後和男(一八九九―一九八一)で、宮座の宝庫と呼ばれた近江(滋賀県)を中心にその周辺についての調査研究が開始された。

肥後は氏子を有する社寺の祭礼が執り行われるとき、一般的にその氏子によって組織される「神事組合」をいわゆる「宮座」と定義つけた。そしてその宮座の形式としては、祭礼を執行する組織が村の中でもある家筋に限って行われる「株座」と、すべての村民が輪番で平等に執り行う「村座」があるとし、祭礼の初期段階での宮座は「株座」が多く、その中から後に「村座」が現れるようになり、それらが複合的に重なり現代に伝わって

いると考察した。しかし、個々の祭礼の分布や歴史的背景など、未だ整理されておらず、結論付けにはまだまだ研究の余地を残していると考えられる。

宮座研究を社会人類的研究の視点で考察した高橋統一は、当時の滋賀県に於ける宮座を調査し、特に株座と村座の別や変遷についての論考を発表した^{〔註13〕}。その調査によると、湖西には比較的株座が多く残っており、明治期に村座に変わっていく事例が数件紹介され、特に北小松の樹下神社の宮座では明治十七年に株座から村座になっている。しかしその変遷の過程で、宮財産の分配や土地の問題から訴訟に及び、いわゆる特権的な座方^{〔註14〕}が敗訴し、村座として当時まで存在していたという。もう一例、大津市の伊香立南庄融神社の宮座でも同じく村方と座方において訴訟がおり、座方が敗訴したが、当時までその株座が残っているという報告もされた。

このような宮座の「株座」「村座」のかたちを過去の研究に見ると、今堅田伊豆神田神社と野神社の氏子や宮座組織と重なってくる。

三一 伊豆神田神社と野神社の宮座

伊豆神田神社と野神社が鎮座する今堅田はかつて漁業を産業とした小番城と、農業と船大工を生業とする出島^{しよしま}からなり、伊豆神田神社は小番城の氏神で、野神社は主として出島の氏神であったと考えられる。

現在小番城地区の氏神は本堅田の伊豆神社となっているが、文化十一年（一八一四）の伊豆神田神社の棟札には「江州滋賀郡今堅田釣漁師」「江州滋賀郡今堅田釣漁師郷土」と肩書きがある人物の名前が記され、それら人物の名前は小番城地区の人々の名前だと言う。小番城に伝わる古老の口碑によると、小番城は昔（文化期より以前）、本堅田伊豆神社の氏子であり、伊豆神社の中に神輿を所有していたが、あるときに本堅田と争いとなり、その神輿が本堅田の座衆によつて担ぎだされ、掘割に捨てられた。それ以降、小番城が本堅田伊豆神社を離れ、新たに伊豆神田神社を勧進して氏神とし、やがて、現在の今堅田に移したという^{〔註5〕}。明治に入り、どのような経緯であったかはわからないが、小番城は再び本堅田伊豆神社の氏子に戻り、今堅田伊豆神田神社の氏子から外れた。

一方の出島は農業を生業としているため、元々の野神大神という野の神を祀る野神神社と何らかのつながりがあったものと考えられる。その草分け的存在である家筋が野神講を組織し、野神神社を中心として株座的な宮座の運営がされていた。明治に入り小番城が伊豆神田神社の氏子から外れると、出島の人々は伊豆神田神社の氏子となって村座的な宮座が運営されるようになったと推測できる。

野神講は肥後和男の『近江に於ける宮座の研究』の中で、株座と位置づけられ、小栗栖健治氏も「野神講は株座の形態をとり、縁組等による株の移動も禁じる閉鎖性の強い宮座だった」

としている。確かに出島の氏神として野神神社が祀られていた近世は閉鎖性の強い株座であったと考えられるが、野神神社に講員以外の氏子が存在しなかったとすれば、宮座と言うよりは名前の通り「講」であるとも考えられる。野神神社を中心としながら、勾当内侍の霊を慰める祭礼を行う講を講員が支えてきたのである。

そして、平成十八年（二〇〇六）からは、野神講中による野神神社の祭礼の運営が難しくなり、伊豆神田神社の氏子によって行われるようになった。まとめると、野神講中によって行われていた野神神社の祭礼は、野神神社の本社にあたる伊豆神田神社の宮総代が引き継ぎ、現在は伊豆神田神社の氏子総代によって行われるようになり、講の祭礼から村座の祭礼へと移行したのである。

おわりに

滋賀県は宮座の宝庫とされ、それぞれ研究者の視点によって調査が続けられてきたが、どれ一つとっても同じものではなく、多種多様である。特に、集落自体が近代化しているところは形式のみが残り、神事組合、いわゆる宮座的な組織が消滅しているという事例は少なくない。宮座的な神事組合組織の消滅には様々な要因があり、これもまた一括りに見ることはできない。ただ、宮座の祭礼を残している地域は、細かい兼業農家が多く、

純粋な「田の神」や「水の神」に対する信仰とともに祭礼が今に伝えられていると言える。

今回取り上げた今堅田野神社の祭礼も例外ではなく、伊豆神田神社の氏子の半数以上が兼業農家であり、勾当内侍という歴史上の人物の鎮魂という性格を持ちながら、五穀豊穡を祈念している。この点についてはもう少し「田の神」いわゆる農耕神の考察も必要である。「田の神」は「山の神」と同じく祖霊神と結ばれることが多い。そう考えると半狂乱の中、湖中に沈んでいった勾当内侍の霊を村人がここに鎮めることで豊穡を願うという「田の神」信仰が野神社で行われることに何ら不思議はない。今後はこの点にも注意していきたいと考えている。

また、祭礼の運営については、野神社の十二軒の講中による運営が難しくなり、その本社である伊豆神田神社の氏子による村座組織に移され、古式が守られているが、その運営組織には宮総代に加えて今堅田役員の参加が見られた。これは、伊豆神田神社の氏子の範囲が旧出島、いわゆる現在の行政区画である今堅田一丁目とほぼ一致するため、今堅田（今堅田一丁目）自体が歴史ある祭礼を維持しようとする役割を担っているためであると言える。

このような事例は他にもあると考えられるが、逆に今に伝わる宮座組織と現在の行政区画とが一致しなく、宮総代と自治会役員を兼務し、個人にとって大きな負担となっている事例の方が多いのかもしれない。

古式祭礼を見聞し、過去の文書を解析しながら、宮座の歴史を紐解くことも重要である。それとともに現代に伝わる祭礼の現状をどのように維持し、後世に伝えていくのかと言う問題も今後、研究課題として取り上げる必要があると考えられる。

- 1 鎌倉時代の御家人。鎌倉末期から南北朝時代にかけて活躍した武将
- 2 新田義貞が後醍醐天皇から下賜された女官。後醍醐天皇に仕えた一条経尹の娘とされている
- 3 『太平記』によると、新田義貞の死後は京都嵯峨の往生院で義貞の菩提を弔って余生を過ごしたとされる
- 4 『野神講文書』「内侍神事由緒記」文政年間に泉福寺住職明覚により成立。この文献による。
- 5 肥後和男『近江に於ける宮座の研究』（東京理科大学、一九三八年）、『宮座の研究』（弘文堂、一九七〇年）
- 6 井上頼寿『京都古習志』（館有神職会、一九四〇年）
- 7 小栗栖健治「村の宮座と祭礼」（『宮座祭祀の史的研究』岩田書院、二〇〇五年）
- 8 小栗栖健治「村の宮座と祭礼」（『宮座祭祀の史的研究』岩田書院、二〇〇五年）第六章一三三頁から一五二頁
- 9 勾当内侍が入水自殺した場所と伝えられる。
- 10 真野神田神社の宮司が野神社の神職を兼務している（以前は雄琴神社の宮司が兼務していた）。
- 11 講中における神事も時代によって変化していたと考えられる。ここで

の比較は昭和五十三年に小栗栖健治によって行われた調査との比較とする。

12 この小唐櫃は「開けずの小唐櫃」と呼ばれ、一度も開けたことがないという伝承があるが、小栗栖健治氏の報告には小唐櫃を調査したところ貴族が使ったと見られる扇子のようなものに藻のまわりついたものが入っていたと記されている。

13 高橋統一「滋賀県の宮座の現況」『社会人類的予備調査』（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所研究年報 一九六九年）

14 ここで言う「座方」とは特権を持つ座衆を意味する。一方の「村方」は特権を持たない氏子を言う。

15 橋本哲男『琵琶湖の民俗誌』「堅田釣漁師」大津市本堅田町小番城」（文化出版局 一九八四年）

成安造形大学所蔵
「寄贈浮世絵コレクション」

小寄
善通

Title :

Seian University of Art and Design's "Donated Ukiyo-e Collection"

Summary :

Here I will introduce Seian University of Art and Design's "Donated Ukiyo-e Collection" consisting primarily of Ukiyo-e prints donated to the university in 2011. There are 71 works (91 pieces) in the collection, most of which have Omi as their motif. The artists is a master of Ukiyo-e who was active from the end of the Edo Period to the beginning of the Meiji Period in Edo (Tokyo).

昨年本学は、附属近江学研究所の活動を支援してくださる一個人の方から、浮世絵版画を中心とするコレクションの寄贈を受けた。コレクションは七三件（九一点）に及び、近江八景や東海道の宿場町、大津絵など近江をモチーフとした作品を主体としている。このなかには浮世絵版画のみならず近江八景図の版木四点や、浮世絵以外に、琵琶湖畔を描いた泥絵一点も含まれている。画家はすべて江戸時代末期から明治時代にかけて、江戸、東京で活躍した浮世絵師である。

まず、本コレクションの内訳であるが、近江八景関連が十八件・三〇点、街道の宿場を扱ったものが四七件・四七点、武者絵・大津絵関連・その他が八件・十四点を数える。

このうち近江八景関連では、栄松齋長喜「近江八景」の版木四面〔(1)―1、数字は作品一覧および写真リストの番号を指す以下同じ。〕が特筆される。いずれも片面彫りで、円窓内に八景のうちの一景を彫出し、その上下に近衛信尹（あるいは近衛政家）作と伝える和歌を添えたものである。版木としての役割を終えたのち、一時火鉢の側板として再利用されていたため、現状では釘穴が認められる。

「近江八景・三井晚鐘」〔1〕3、「近江八景・堅田落雁」〔1〕4は洋風表現を顕著に取り入れたもので、作品一覽では寄贈時のリストに従い、いずれも柳々居辰斎の作品としているが、前者〔1〕3は歌川国虎の作品である可能性も考えられる。筆者判定については後考に俟ちたい。また作者不詳の「泥絵三井寺・琵琶湖」〔1〕11は、江戸時代末期に洋風表現と結びついて制作された泥絵の技法による近江名所図の一例として見逃せない資料である。現在の天津港あたりから北方、琵琶湖と三井寺を捉えた景観である。

このほか、歌川芳虎「近江八景図」〔1〕7、三代歌川豊国「近江八景」〔1〕8、二代歌川国貞「近江八景」〔1〕10など、近江八景を背景にして、歌舞伎などの登場人物を組み合わせた作品も含まれる。

次に街道の宿場町を描いたものでは、名所絵の名手歌川広重の手になる「東海道五十三次之内」〔2〕1があげられる。有名な保永堂板で名を挙げた広重による東海道五十三次シリーズのなかの葛吉板である。二代、三代広重による作例も含まれており、二代広重（喜斎立祥）のものとしては「東海道五拾三驛」〔2〕8、五点、「東海道五十三次」〔2〕9、二点があり、三代広重による明治八年（一八七五）の「東海名所改正道中記」〔2〕3、五点は文明開化当初の天津市街などを描き、風俗資料としても興味深い。

また、本コレクション中、シリーズ作品として最多の作品数

十九点を数えるのが「東海道名所風景」〔2〕2である。「御上洛東海道」とも称される本作品は、文久三年（二八六三）二月から三月にかけて將軍徳川家茂が上洛するに際し、江戸の版元十数軒が協力して国貞（三代豊国）、二代広重以下歌川派十六名の絵師を動員して制作されたもので、総数一六二点に及ぶ。本コレクションでは豊原国周、歌川国貞、艶長、芳艶、国綱、芳虎、周麿、二代広重、芳盛、月岡芳年の十人の作品が含まれる。これに類する作品に「末廣五十三次」〔2〕4がある。長州征伐のために慶応元年（一八六五）に大坂入りした將軍徳川家茂の三度目の上洛を題材にしたもので、二代歌川国貞、二代歌川広重、五雲亭貞秀、歌川芳幾、二代歌川国輝、月岡芳年、歌川芳盛、豊原国周の八名が参加している。將軍が率いるものしい行列を主にした表現で、「御上洛東海道」のもつ比較的穏やかな景観描写とは異なった雰囲気を持つ作品である。本コレクションには五雲亭貞秀、月岡芳年、歌川芳盛の作品が含まれる。

「東海道五十三對」〔2〕5は広重、国芳、三代豊国の競作で全六二枚のシリーズ。本コレクションでは幕末の鬼才国芳が土山の坂上田村麻呂と天津の土佐又平を描いたものを含んでいる。このほか、三代歌川豊国（国貞）の作品「東海道五十三次之内・大津ノ図」〔2〕6や「東海道五十三駅名画之書分草津大津」〔2〕10では大津絵の店頭風景が描かれ、同「木曾六十九驛・鳥居本」〔2〕11では幕末期の制作にふさわしく、

名所絵に役者絵が重ね合わされている。

以上のほか、武者絵としては歌川国芳「耀武八景 粟津夕照 巴御前」〔3〕-3〕や、その弟子歌川芳員による「明智左馬助湖水渡り之図」〔3〕-1〕、大津絵関連では、やはり国芳による「流行逢都絵希代稀物」〔3〕-4〕や河鍋曉斎「狂画大津絵」〔3〕-8〕などがある。

最後に本コレクションに登場する浮世絵師の一覧を以下に掲げる。

栄松齋長喜（生没年不詳）

鳥山石燕の門人で歌麿と同門。作画期は宝暦から寛政年間に亘る。

柳々居辰斎（生没年不詳）

初め俄屋宗理に学び柳々居の号を譲られたと伝える。のち北齋（辰政）の門人となり辰の一字を譲り受ける。遠近法や陰影法を用いた洋風風景画で知られる。

歌川国虎（生没年不詳）

歌川豊国の門人。遠近法を用いた洋風の風景画家として知られるが作品は極めて少ない。代表作に「近江八景」八枚揃がある。

北尾政美
（二七六四〜一八二四）

北尾重政の門人。寛政六年（一七九四）津山藩御用絵師となり、鋳形蕙斎と称した。のち狩野惟信にも師事。鳥瞰的視点の風景版画を発案したことで知られる。

歌川豊広

（一七七三〜一八三〇）

歌川広重

（一七九七〜一八五八）

二代歌川広重

（一八二六〜一八六九）

三代歌川広重

（一八四二〜一八九四）

歌川国貞

（一七八六〜一八六五）

二代歌川国貞

（一八二三〜一八八〇）

五雲亭貞秀

（一八〇七〜一八七九？）

豊原国周

（一八三五〜一九〇〇）

歌川国綱（生没年不詳）

歌川豊春の門人で初代豊国と同門。広重の師。

歌川豊広の門人。

初代広重の門人。初め歌川重宣。安政六年（一八五九）初代広重の養女お辰の婿となり、二代広重を名乗る。慶応元年（一八六五）お辰と離縁し、以後横浜に移り住み喜齋立祥と号する。

初代広重の門人。初め歌川重政。慶応三年（一八六七）初代広重の養女お辰に婿入りし三代広重を名乗る。

三代歌川豊国のこと。作品数は浮世絵師の中でも最多といわれ、一万点以上に及ぶとされる。

三代歌川国政のこと。嘉永五年（一八五二）三代豊国の婿養子となり二代国貞を名乗る。

歌川（橋本）貞秀。初代歌川国貞の門人。

豊原周信及び歌川国貞の門人。嘉永元年（一八四八）国貞に入門。役者絵の国周として知られ、また明治の写楽とも称せられる。

初代歌川豊国の門人。

歌川国芳

(一七九七～一八六一)

歌川芳艶

(一八二二～一八六六)

歌川芳盛

(一八三〇～一八八五)

歌川芳虎 (生没年不詳)

歌川芳員 (生没年不詳)

歌川艶長 (生没年不詳)

河鍋晁斎

(一八三二～一八八九)

月岡芳年

(一八三九～一八九二)

小林永濯

(一八四三～一八九〇)

田口米作

(一八六四～一九〇三)

初代歌川豊国の門人。

国芳の門人。「御上洛東海道」では十六点を担当。

国芳の門人。晩年は横浜に居住。

国芳の門人。安政五年(一八五八)師から破門される。

国芳の門人。

歌川芳艶の門人。

初め国芳の門人。のち狩野洞白にも師事。狩野派を離れて以後、周磨と称し浮世絵を描く。

国芳の門人。その作風から「血まみれ芳年」の異名をもつ。慶応元年(一八六五)祖父の弟である月岡雪斎の姓を継承する。

狩野永恵の門人。明治に入り浮世絵を描く。

小林清親の門人。

な目録作成及び写真撮影にあたっては、本学芸術文化デザインクラス四年、青山雄介、久保田まり、濱田薫、同三年、神谷佳那子、吉岡美咲の協力を得た。

末尾ながら、寄贈者ならびに学生諸氏に感謝申し上げます。

なお、本稿に掲げた目録は旧蔵者が作成されていた目録の体裁を尊重しつつ、一部加除を加えたものである。また、最終的

成安造形大学所蔵「寄贈浮世絵コレクション」目録

〈浮世絵版画〉

- (1) 近江八景 73件 91点
 (2) 街道 47件 47点
 (3) 武者絵・大津絵関連・その他 8件 14点
- (1) 近江八景 (18件・30点)
- 1 栄松齋長喜「近江八景」 版木 四面(刷り見本六枚付属)
- ① 「比良暮雪」(20・9cm×16・3cm)
 ② 「石山秋月」(20・8cm×16・5cm)
 ③ 「勢田夕照」(20・8cm×16・7cm)
 ④ 「矢橋帰帆」(21・0cm×16・8cm)
- 2 歌川豊広「近江八景・瀬田夕照」
 一枚(竪中判) 23・1cm×17・6cm)
- 3 柳々居辰斎「近江八景・三井晚鐘」
 一枚(横中判) 15・4cm×21・4cm)
- 4 柳々居辰斎「近江八景・堅田落雁」
 一枚(横大判) 23・1cm×34・7cm)
- 5 北尾政美「近江八景・粟津晴嵐」
 一枚(竪中判) 25・8cm×19・2cm)
- 6 歌川広重「近江八景」(有田屋清右衛門板) 横中判
- ① 「石山秋月」一枚(14・8cm×20・8cm)
 ② 「辛崎夜雨」一枚(14・8cm×20・8cm)
- ③ 「粟津晴嵐」一枚(14・7cm×20・7cm)
 7 歌川芳虎「近江八景図」三枚続
 (竪大判) 36・2cm×72・6cm) 明治三年(一八七〇)
- 8 三代歌川豊国「近江八景」(廣小路林庄板)
 竪大判 嘉永五年(一八五二)
- ① 「近江八景之内・三井晚鐘小町」一枚(36・0cm×23・7cm)
 ② 「近江八景之内・三井晚鐘 関兵衛」一枚(36・4cm×24・7cm)
- 9 三代歌川豊国「近江八景之内・矢橋帰帆」(山城屋甚兵衛板)
 一枚(竪大判) 35・6cm×25・4cm) 安政二年(一八五五)
- 10 二代歌川国貞「近江八景」(鳶屋板) 竪大判
- ① 「近江八景之内・辛崎夜雨」三枚続(36・8cm×74・4cm)
 ② 「近江八景之内・瀬田夕照」三枚続(35・9cm×74・4cm)
- 11 「泥絵 三井寺・琵琶湖」一枚(33・3cm×48・4cm)
- (2) 街道 (47件・47点)
- 1 歌川広重「東海道五十三次之内」(鳶屋吉蔵板) 横中判
- ① 「大津」一枚(16・4cm×22・3cm)
 ② 「草津」一枚(16・4cm×22・5cm)
 ③ 「水口」一枚(16・4cm×22・3cm)
- 2 「東海道名所風景」(通称「御上洛東海道」)
 竪大判 文久三年(一八六三)
- ① 豊原国周「東海道之内・双川」(伊勢庄板)
 一枚(33・6cm×22・5cm)

- ② 歌川艶長「東海道名所之内・桶狭間」(正文堂板)
一枚 (32・9 cm × 22・1 cm)
- ③ 歌川芳艶「東海道名所之内・熱田一の鳥居」(正文堂板)
一枚 (32・8 cm × 22・0 cm)
- ④ 歌川国綱「東海道・庄野」一枚 (33・4 cm × 22・6 cm)
- ⑤ 二代歌川国貞「東海道・亀山」(海老林板)
一枚 (33・1 cm × 22・1 cm)
- ⑥ 二代歌川国貞「東海道之内・関」一枚 (33・2 cm × 22・3 cm)
- ⑦ 歌川芳虎「東海道・坂ノ下」(佐野富板)
一枚 (33・3 cm × 22・1 cm)
- ⑧ 周磨(河鍋眺斎)「東海道・土山・鈴ヶ山・坂ノ下」(大金板)
一枚 (32・8 cm × 22・0 cm)
- ⑨ 二代歌川広重「東海道・土山」(糸庄板)
一枚 (33・2 cm × 22・2 cm)
- ⑩ 歌川芳艶「東海道・土山」(正文堂板)
一枚 (32・9 cm × 22・1 cm)
- ⑪ 豊原国周「東海道・水口」(越前屋嘉十板)
一枚 (33・5 cm × 22・3 cm)
- ⑫ 月岡芳年「東海道・石部」(角金板)
一枚 (34・0 cm × 22・8 cm)
- ⑬ 歌川芳盛「東海道・草津」(太田屋多吉板)
一枚 (32・5 cm × 21・9 cm)
- ⑭ 歌川芳盛「東海道・瀬田唐橋」(魚屋栄吉板)
一枚 (32・6 cm × 22・3 cm)
- ⑮ 歌川芳艶「東海道名所之内・石山之秋月」(正文堂板)
一枚 (32・8 cm × 21・8 cm)
- ⑯ 豊原国周「東海道・膳所・矢橋の焔帆」
一枚 (33・2 cm × 22・3 cm)
- ⑰ 二代歌川広重「東海道・大津」(丸鉄板)
一枚 (33・3 cm × 22・3 cm)
- ⑱ 周磨(河鍋眺斎)「東海道名所之内・比叡山」(丸鉄板)
一枚 (32・8 cm × 22・0 cm)
- ⑲ 月岡芳年「東海道・大津三井寺」(角金板)
一枚 (33・8 cm × 22・5 cm)
- 3 三代歌川広重「東海名所改正道中記」(浅草並木山清板)
豎大判 明治八年(一八七五)
- ① 「大津」一枚 (32・8 cm × 22・2 cm)
- ② 「水口」一枚 (33・0 cm × 22・3 cm)
- ③ 「土山」一枚 (33・0 cm × 22・4 cm)
- ④ 「庄野」一枚 (32・8 cm × 22・8 cm)
- ⑤ 「藤川」一枚 (32・9 cm × 22・8 cm)
- 4 「末廣五十三次」豎大判 慶応元年(一八六五)
- ① 五雲亭貞秀「大津」(伊勢屋兼吉板)
一枚 (33・7 cm × 23・8 cm)
- ② 月岡芳年「草津」(木屋宗次郎板)
一枚 (33・9 cm × 24・0 cm)
- ③ 歌川芳盛「石部」(相下板)一枚 (33・5 cm × 22・7 cm)
- ④ 五雲亭貞秀「水口」(糸庄板)一枚 (33・5 cm × 22・8 cm)
- ⑤ 五雲亭貞秀「土山」(伊勢屋兼吉板)

- 5 「東海道五十三對」 竪大判 一枚 (33・2 cm × 22・7 cm)
- ① 歌川国芳「土山」 一枚 (36・5 cm × 24・5 cm)
- ② 歌川国芳「大津」 (伊場屋仙三郎板) 一枚 (36・5 cm × 24・0 cm)
- 6 歌川国貞「東海道五十三次之内・大津ノ図」 一枚 (竪中判) 24・9 cm × 18・3 cm
- 7 歌川芳員「東海道五十三次」 横小判 嘉永六年 (一八五三)
- ① 「大津」 一枚 (11・0 cm × 17・3 cm)
- ② 「草津」 一枚 (10・9 cm × 17・3 cm)
- ③ 「石部」 一枚 (10・9 cm × 17・3 cm)
- 8 喜齋立祥 (二代歌川広重) 「東海道五拾三驛」 (丸鉄板) 竪中判 慶応元年 (一八六五)
- ① 「土山」 一枚 (24・2 cm × 17・5 cm)
- ② 「水口」 一枚 (24・2 cm × 18・2 cm)
- ③ 「石部」 一枚 (24・2 cm × 17・5 cm)
- ④ 「草津」 一枚 (24・2 cm × 18・1 cm)
- ⑤ 「大津」 一枚 (24・2 cm × 17・5 cm)
- 9 二代歌川広重「東海道五十三次」 竪中判 文久三年 (一八六三) (元治元年 (一八六四))
- ① 「大津」 一枚 (22・2 cm × 16・3 cm)
- ② 「草津」 一枚 (22・3 cm × 16・3 cm)
- 10 三代歌川豊国「東海道五十三駅名画之書分 草津・大津」 (太田屋多吉板) 一枚 (竪大判) 34・3 cm × 23・8 cm
- 11 三代歌川豊国「木曾六十九驛・鳥居本」 (伊勢兼板) 一枚 (竪大判) 36・2 cm × 25・0 cm 嘉永五年 (一八五二)
- (3) 武者絵・大津絵関連・その他 (8件・14点)
- 1 歌川芳員「明智左馬助湖水渡り之図」 (上州屋板) 三枚続 (竪大判) 36・8 cm × 74・0 cm
- 2 月岡芳年「大日本名将鑑 大兄皇子・中臣鎌足・入鹿大臣」 一枚 (竪大判) 35・2 cm × 23・7 cm
- 3 歌川国芳「耀武八景 粟津夕照 巴御前」 (遠州屋彦兵衛板) 一枚 (竪大判) 36・5 cm × 25・0 cm 嘉永五年 (一八五二)
- 4 歌川国芳「流行逢都絵希代稀物」 (湊屋小兵衛板) 三枚続 (竪大判) 36・2 cm × 73・0 cm
- 5 小林永濯「和英對譯大日本功名略傳・藤原鎌足」 一枚 (竪大判) 36・7 cm × 25・2 cm 明治二〇年 (一八八七)
- 6 二代歌川広重「諸国六玉河・近江野路玉川」 (濃安板) 一枚 (竪大判) 36・1 cm × 24・5 cm 文久三年 (一八六三)
- 7 田口米作「米作漫筆名画大津絵之巻」 三枚続 (竪大判) 34・3 cm × 72・2 cm
- 8 河鍋曉齋「狂画大津絵」 一枚 (竪大判) 36・5 cm × 23・9 cm



(1)-1-①



(1)-1-①



(1)-1-②



(1)-1-②



(1)-1-③

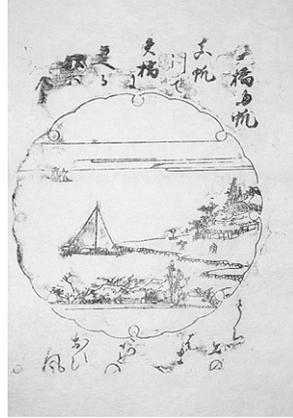


(1)-1-③

成安造形大学所蔵「寄贈浮世絵コレクション」図版
(図版下の数字は目録番号と対応)



(1)-1-④



(1)-1-④



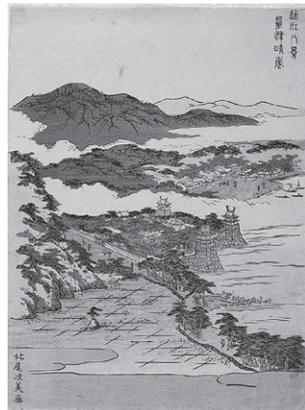
(1)-2



(1)-3



(1)-4



(1)-5



(1)-6-①



(1)-6-②



(1)-6-③



(1)-7-a



(1)-7-b



(1)-7-c



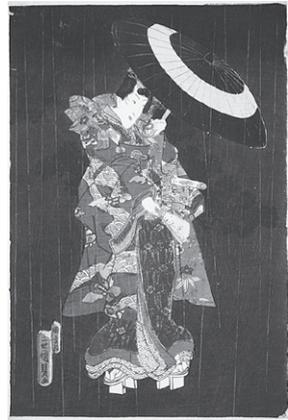
(1)-8-①



(1)-8-②



(1)-9



(1)-10-①-a



(1)-10-①-b



(1)-10-①-c



(1)-10-②-a



(1)-10-②-b



(1)-10-②-c



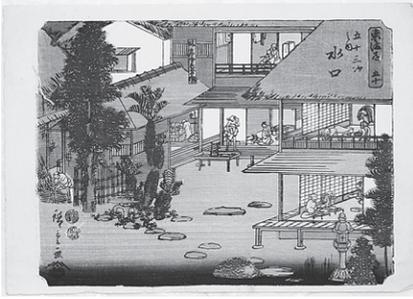
(1)-11



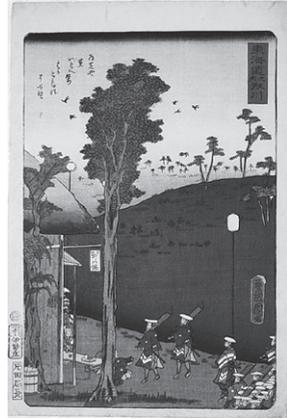
(2)-1-①



(2)-1-②



(2)-1-③



(2)-2-①



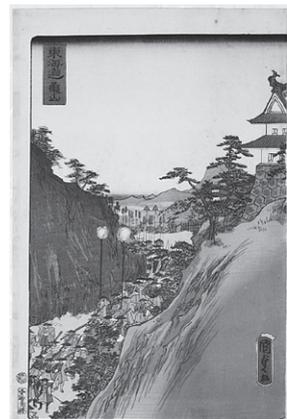
(2)-2-②



(2)-2-③



(2)-2-④



(2)-2-⑤



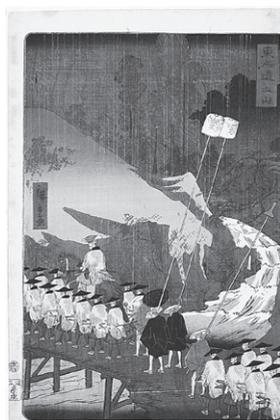
(2)-2-⑥



(2)-2-⑦



(2)-2-⑧



(2)-2-⑨



(2)-2-⑩



(2)-2-⑪



(2)-2-12



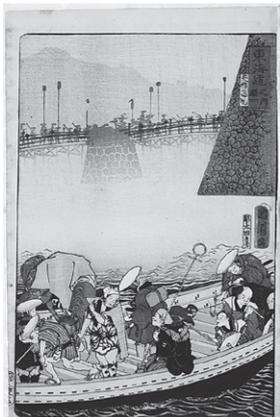
(2)-2-13



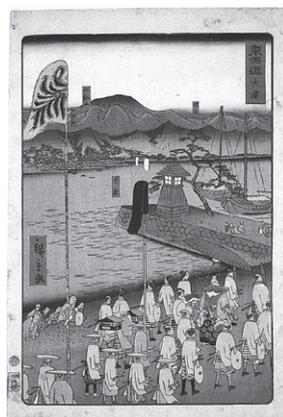
(2)-2-14



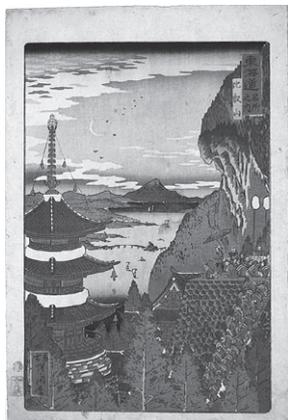
(2)-2-15



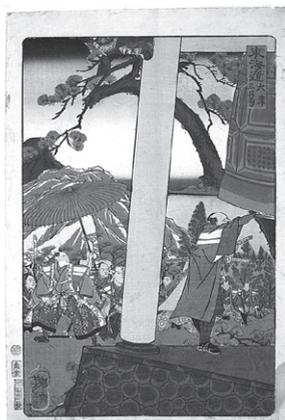
(2)-2-16



(2)-2-17



(2)-2-18



(2)-2-19



(2)-3-1



(2)-3-2



(2)-3-3



(2)-3-4



(2)-3-5



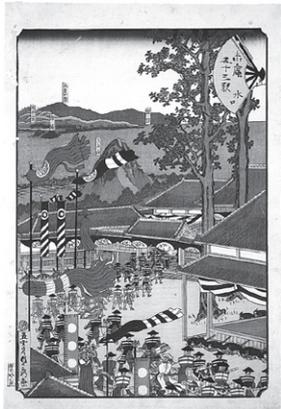
(2)-4-1



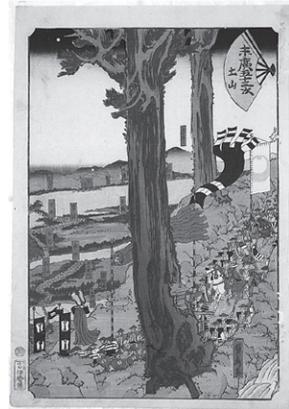
(2)-4-2



(2)-4-3



(2)-4-4



(2)-4-5



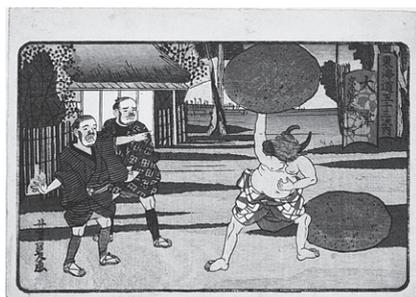
(2)-5-①



(2)-5-②



(2)-6



(2)-7-①



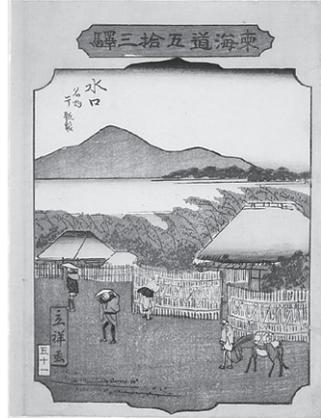
(2)-7-②



(2)-7-③



(2)-8-①



(2)-8-②



(2)-8-③



(2)-8-④



(2)-8-⑤



(2)-9-①



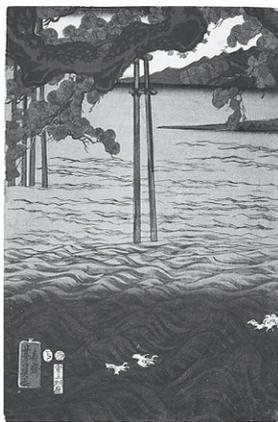
(2)-9-②



(2)-10



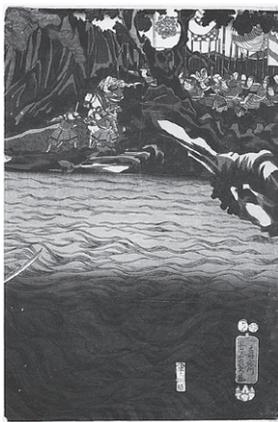
(2)-11



(3)-1-a



(3)-1-b



(3)-1-c



(3)-2



(3)-3



(3)-4-a



(3)-4-b



(3)-4-c



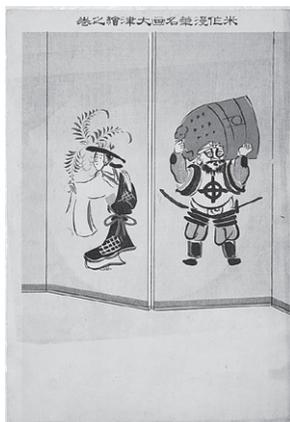
(3)-5



(3)-6



(3)-7-a



(3)-7-b



(3)-7-c



(3)-8

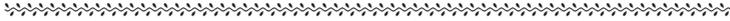
執筆者一覧

大岩 剛一 成安造形大学教授・附属近江学研究所研究員

大原 歩 成安造形大学非常勤講師

加藤 賢治 成安造形大学研究支援部門主査・附属近江学研究所研究員

小嵯 善通 成安造形大学教授・附属近江学研究所研究員



編集後記

このたび、成安造形大学附属近江学研究所は『近江学研究所紀要』を創刊いたしました。近江学研究所では、これまで学外の客員研究員を含めた多くの方々の論考や近江の魅力を満載した『近江学』を年1回刊行してまいりました。お蔭をもちまして『近江学』は年頭に刊行した最新号で第4号を数え、第4号からは、『文化誌「近江学』』として一般の多くの近江ファンの皆様にもお楽しみいただけますよう、内容も一新いたしました。

今回発刊いたしました本紀要は、それとは別に本学の学内研究員による研究成果を掲載したものです。この創刊号には、学内研究員による3編の論文・資料紹介を掲載しています。特に論文2編は、地の利を生かした地道なフィールドワークの成果として、本学らしい内容になったと自負しています。

今後も、芸術系大学という特色を活かした研究紀要であり続けたいと考えています。どうぞ『文化誌「近江学』』ともども『近江学研究所紀要』をよろしく願います。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第1号

発行日 平成24年3月19日

発行者 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2012

ISSN 2186-6937

【 】

成安造形大学

JOURNAL OF OMI MULTI-CULTURAL INSTITUTE
OF SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN
NO.1